

フィールドで出会う

# 風と人と土 3

田中樹・宮壽英寿・石本雄大 編























## 使用写真

- 表紙 畜力揚水井戸で水を汲み上げる少年  
[2015年10月 インド・ラージャスターン州 撮影=宮寄英寿]
- P. 1 おとうさんのウシ  
[2010年6月 ザンビア南部州 撮影=石本雄大]
- P. 2 スイギュウと少年  
[2015年10月 インド・ラージャスターン州 撮影=宮寄英寿]
- P. 3 刈り残されたソルガムの穂  
[2008年3月 ザンビア・南部州 撮影=田中樹]
- P. 4 さんばつイタイヨー！  
[2009年6月 ザンビア・南部州 撮影=石本雄大]
- P. 5 川辺に建つ家々の石垣はきれいだが、トイレや台所の污水パイプが突き出ているのは困ったものだ  
[2017年10月 インドネシア・ボゴール市 撮影=田中樹]
- P. 6 インド洋で魚釣り、でも、空振り  
[2018年2月 タンザニア・ザンジバル 撮影=田中樹]
- P. 7 沢山とれたよトモロコシ  
[2010年1月 ザンビア・南部州 撮影=石本雄大]
- P. 8 作物残渣の除去作業  
[2014年6月 セネガル・中西部 撮影=清水貴夫]
- P. 9 仔ヒツジを抱く牧畜民の子ども  
[2014年8月 インド・ラージャスターン州 撮影=宮寄英寿]
- 裏表紙 夜店を飾る幻想的なランタンの灯  
[2017年9月 ベトナム・ホイアン市 撮影=田中樹]



多くの執筆者の協力を得て、早くも「フィールドで出会う風と人と土」の第三巻をお届けすることができました。

第一巻（2017年3月）と第二巻（2018年2月）、そして今回の第三巻の記事を読んでいて思い浮かんだ言葉があります。それは、「ひらめき」です。

「ひらめき」という言葉は、「思いつき」ではありません。言い直すと「長いあいだ心の中にとどめてきた発見や経験や想いなどが熟成し、ある瞬間に明快でまとまりのある言葉やイメージとともにあらわれること」でしょうか。無理して難しく言うと「蓄積された知識や経験の瞬間的な洞察の発露」と言えるかもしれません。

このエッセイの記事は、「ひらめき」に至る前の発見や経験や想いを紡いだものです。それらを豊かにするものは、一人ひとりの感性や優しい眼差し、様々な問題に向き合う厳しい態度、理想の実現を目指す強い心、そしてユーモアだと信じています。

このエッセイを手にとったあなたは、多くの未完成な研究者たちに出会っています。そこから見えてくる風景は、アジアやアフリカとそこに住まう人びとにつながっています。これから研究の中で幾度も訪れるであろう「ひらめき」は、このような人びとと共にあります。また、あなたと共にあります。

田中樹、宮寄英寿、石本雄大

## 目次

- 014 カドナで朝食を 渡邊芳倫
- 018 西アフリカ外食紀行 その4ーワガドゥグの敵母 清水貴夫
- 023 市場での出会いとお弁当 荒木良一
- 029 デーツの名産地ーサハラのオアシス都市ビスクラ 石山俊
- 034 サヘルのウシはいつ眠るーブルキナファソ、サヘル地域の牧畜民フルベの事例 宮寄英寿
- 044 ガーナの子どもと何して遊ぶ？ートロトロごっこだるまさんが転んだ 桐越仁美
- 050 徒弟アジズのお金の話 遠藤聡子
- 056 受け継がれるもの 神代ちひろ
- 061 嘘つきは本当に悪い人？ 柴田誠
- 067 熱帯アフリカのフィールド調査では体調管理が大切 角野貴信
- 072 裁判から見たことー子どもに石を投げられて 砂野唯
- 078 撮られるのは音楽に興じるその姿 大門碧
- 083 印度の井戸 遠藤仁
- 091 極小書店の心意気 寺田匡宏
- 095 編者と執筆者の紹介

## カドナで朝食を

長期の野外調査を行う上で、食事は重要である。朝食はこれから始まる1日のエネルギーとやる気の充填に、夕食は疲れを癒し心地よい睡眠のために。

ここでは、思い出深いナイジェリアの朝食について書きたいと思う。なぜナイジェリアの朝食が思い出深いのかというと、その風景が私にとって非常に心地よかったからである(写真①、図①)。

私は2002年ごろ、ナイジェリアの北部、カドナの街で人工林の調査をしていた。カドナは半乾燥地で、サバンナの植生が広がっているが、ユーカリなどの人工林を形成するには十分な雨量があった。カドナでは、ユーカリを育てて電柱を作ろうと計画していたのだが、植林がうまくいく所、そうでない所があり、その原因を調査するために私は滞在していたのだ。

人工林へ調査に行く前、早朝の涼しい時間に調査スタッフと共にカフェに入る。カフェでは、マスターがコーヒーを用意し始め、そのあい間に、ヌードルを作る。朝の青みがかかった緑の灌木の下、黄や青色のコップに注がれる茶色のコーヒー、パチパチと燃えた薪の上でさっとゆでられ粉末ソースを絡められたヌードル。これ

らの風景が美しかった。

ナイジェリアと聞くと、ラゴスなどの車の渋滞とクラクションが鳴り響く風景を思い浮かべるかもしれないが、ここカドナの朝は静かであった。アフリカの多くの街で見えるような、建物と道路の間の緩衝帯(専門的には、中央分離帯と言うようです)、日本では歩道にあたる部分の幅が4車線くらいあり、そこにこのカフェはあるのだけれど、そこから見える風景は、たまに通る車、たまに通る鶏、程よく行き来する人々、吹き抜ける半乾燥地の乾いた早朝の風、すべてが心地よかった。

余談であるが、私は、涼しいか少し寒いくらいの半乾燥地が好きである。なぜなら半乾燥地は、目に入ってくるモノが湿潤地より少なく、



写真①参考として、最も形式に近い露店カフェ(ガーナ)

乾燥地よりは多く適量である。また、少し寒いというのが、清潔で神聖な感じがして私は好きだからである。

その好きな半乾燥地の中でも、特に好きな少し寒い早朝、日が昇った後の1時間は最高に気持ちがいい。その気持ちがいい時間に取り朝食は、心地よい空間の中で、これぞ！というものが食べたい。



図①私がお世話になったカドナのカフェのイメージ図

そういうことで、カドナの朝食はよく覚えている。それでは、どのような食事をとったのかを以下に記したい。

### 練乳入りのコーヒー

カドナのカフェで飲むコーヒーはどのような物であるのか？ずばり、インスタントのカフェオレである。このカフェオレは、薪で沸かした湯をプラスチックのコップに注ぎ、インスタントのコーヒーをティースプーン1杯、さっと混ぜた後、牛乳ではなくて練乳を、これでもか〜という程度入れる。カフェオレ全容積のざっと3割が練乳と言っても過小評価ではない。ナイジェリア、少なくともカドナでは、コーヒーを頼むと基本的にこの練乳カフェオレが出てくる。

練乳は缶に入っていて、使用するときは釘のような工具で2か所、カンカンと缶に穴をあける。一つは注ぐ用、残りはエア抜きだ。すかさず、ひっくり返された缶は、プラスチックのコップに傾いた状態ではめ込まれ、自立する。計算されたコップの程よい内径が、缶を斜め45度でホールドする。アイボリー色の練乳の細い線がコップに注がれる。この間、マスターはオムレツ料理など別の仕事を行う。

この練乳カフェオレ、はっきり言って激甘だ。最初は甘すぎてあまりおいしくなかった。しか



し、調査が長引き、疲れがたまってくると、この味がたまらなくおいしく感じる。慢性の労働疲れを癒し、その日のエネルギーを充填することができるのは、このくらいパンチの効いた甘ったるい飲み物であると強く感じた。

日本にも、これとよく似た飲み物があると思う、そう、甘酒である。日本で体を動かす仕事を生業にしている方や、フィールドワーカーは、朝に甘酒を1缶くらいグビッと飲んで仕事に向かえば、疲労も軽減されるのでは？と考えつつ、ナイジェリアのカフェオレの味を今思い出している。

## インドネシアのラーメン

午前の作業は、前述の練乳入りのカフェオレだけでは、腹が減ってもたない。朝食は？と言うと、パンかヌードルの2択である。パンは、次の項で書きたいので、ここではヌードルについて書かせていただく。

ヌードルはインドネシア製のインスタントラーメン、「Indo mie (インドーミー)」である。インドネシアで作られたインスタントラーメンも、まさか、ナイジェリアで食されていたとは思ってもみなかっただろうと当時は思っていたが、実はこのインスタントラーメン、世界的に有名であった。

フライパンに水を薄く引いて、この麺を入れ

てほぐした後、粉末ソースをまぶし、卵を混ぜて、焼きそばのようにして皿に盛る。焼きそばと違うところは、混ぜるのが卵だけで、付け合わせとしてソーセージや、玉ねぎなどが、ヌードルの横に付く。

これが、見た目はとてもインスタントラーメンであるという感じがしない。よく言うと、西洋のパスタのようである。味も、卵の甘さと、ラーメンの塩味が混じり、非常においしい。

カドナのカフェのマスターは、インスタントラーメン本来の作り方を大幅にアレンジし、まるで新しい食べ物を作り出した。それが、すごくおいしくて素敵だった。

そういえば、この調査の数年後、インドネシアからの留学生が、袋麺の袋に麺を残し、スパイス等の小袋を取り出した後、その袋麺の袋に湯を注ぎ、取り出した小袋の中身を入れてラーメンを作っていた。固定概念にとらわれないってこういうことなのかなと思った。

## パンの事情について

朝食のもう一つの選択肢、パンについて書きたいと思う。是非、西アフリカに滞在した際には注意して観察してほしいのだが、西アフリカのパンは、コッペパン圏(食パンも含む)とフランスパン圏の2つに大きく分類される。私が調査し

ていたナイジェリアは、コッペパン圏であった。

コッペパンに肉と玉ねぎを挟んでムシャムシャと食べるわけであるが、コッペパンの皮の部分にほのかに甘みがあって、サンドする具材と合い、非常においしかったのを覚えている。

私は、フランスパン圏にも滞在したこともあったが、フランスパンはコッペパンよりも見た目が美しく、これもなかなかおいしい。ただ、滞在場所が乾燥地のニジェールであったので、パンを不用意に放置しておく、カチカチに乾燥し、硬くて歯が立たなくなるので大変だったことを覚えている。日本では煎餅やパスタを放置すると湿気てしまうので逆の感覚だ。

17

このフランスパン圏、現地の人々の唯一のフランスパンへの不満はボソボソした食感であると言っていた。しかしなぜか、コッペパン圏を見習って、コッペパンを作ろうとフランスパン圏はしない。ナイジェリアのコッペパン圏から国境をこえて隣国のフランスパン圏ベナンに入国した瞬間に、売られているパンがフランスパンになるので面白いものである。

と、思っていたら数年前、外見はフランスパンだけど、コッペパンのようなしっとりした食感のパンを、フランスパン圏で見つけた。「これは、アフリカにおける大いなる改良だ」と地元の方が言っていた。私もそうだと思い、開発者へ賛辞を贈りたい。

野外の調査はしんどい。簡単に表現すると、それはまるで魂を削る作業である。それでもなぜ調査を続けるのか？その先に新しい発見があるからであるが、程よい疲労を感じつつ取る心地よい朝夕の食事の存在も、野外調査を続けることができる一要因であると最後に指摘し、この話を終わりたい。

渡邊芳倫

## 西アフリカ外食紀行 その4

### — ワガドゥグの巖母 —

#### ワガドゥグのある「メシ屋」の光景

注文を取る声と食べ終わった客が発するお礼の言葉以外は麺をすする音しかしない。頑固おやじのラーメン屋にしばしば見られる光景だが、このような屋台が、このエッセイの舞台となるブルキナファソの首都ワガドゥグにもある。

「西アフリカ外食紀行 その4」は、「その1」<sup>1</sup>でも紹介した「牛皮メシ」を売るオバチャンの話である。このオバチャンの屋台は私の定宿の並びに店をだしており、コメ食いの私にとっては、最も手軽に、そして唯一朝食でコメが食べられる屋台である。「その3」で紹介した「メシ屋」の分類から言えば、2つ目の模擬店舗型にあたる。私はすでに7～8年間このオバチャンの店に通っているが、実は私は未だにこのオバチャンの名前すら知らない。ただ、一人の客として、ひたすら腹を満たし、その背徳的なほどの旨さに舌鼓を打つのみである。

オバチャンの屋台の開店は朝6時半ころだ。暑いワガドゥグでは、日の出の前までの涼しい時間帯が最良のデスクワークの時間だ。私は6時ころになると定宿の2階のテラスからそちらを

覗く。オバチャンが山盛りのコメのタライを頭の上に乗せて、古びた木のテーブルに運び込むさまが見えると、私はすぐに小銭をもってそちらに向かう。

以前は7時半、8時にオバチャンの屋台に行くことも多かった。しかし、8時半ころに行ったときには、ほとんどの場合が売り切れている。そして、なによりも、早い時間に行けば、アツアツのメシが食べられるので、6時半ころにノコノコとオバチャンのところに行く、という日課であった。

#### オバチャンの「メシ屋」

オバチャンは柄が折れたお玉でメシをよそう。一玉にトマトソースがついて50セーファ・フラン(約10円、以下フラン)。これに牛の皮<sup>2</sup>を煮込んだものが一片で50フランだ。数年前までは、つまり、今よりも少し若く、いくらでも食べられたころには、コメ200フラン、牛皮150フランが私の定番だったが、最近ではコメ100フランということもある。それでも普通の「メシ屋」の一人分よりも多いくらいだ。いずれにしても、200フラン～350フラン、これがこのオバチャンの屋台の価格帯である。「その3」で紹介した有名なセネガル料理のレストランを営むFさんの店は、平均よりもかなり高いものの、大方700

フラン〜800フランだから、このオバチャンの屋台の安さはよくわかるだろう。

現在は牛皮ソースと揚げ魚のみの具材しか出していないが、以前は、ムギラという、炊いたコメをすりつぶして団子状にする料理も出していた。ガーナでよく食べられるオムトゥという料理と同じものだ。ムギラは牛皮ソースと並ぶ、オバチャンの屋台の看板メニューだったが、ここ数年はやらなくなってしまった。

### オバチャンの流儀

ワガドゥグの「メシ屋」では、注文の時も押しが強くなければ、後から来た客にどんどん先を越されて注文されてしまう。すっかりブルキナファソとはそのようなものだと思い込んでいた私は、初めてこのオバチャンの屋台で食べた時も前の人を押しつけて注文をしようとした。すると、なんとオバチャンは「わかってるから



写真①牛皮ソース

ちょっと待ってなさい」と外国人の私を叱りつけたのだ。周りで並んでいた人は、聞かなかったフリをしていたのだと思うが、きっと外国人がオバチャンに叱られている姿はなかなか面白い光景だっただろう。私は、とてもばつが悪かったことをよく覚えている。言わずもがなだが、それ以降は、私は静かにオバチャンが注文を取ってくれるのを待つようにしている。だが、オバチャンは、ちゃんと客が来た順番を見ている、

黙っていても私の順番になると、「ナサラ（モシの言葉で「白人」）」と呼んで注文をとってくれる。順番が逆になったのは、学校に行く前に急いで朝メシを駆け込もうとする小学生が居た時くらいである。もちろん、オバチャンからは「悪いね。先に食べさせてやって」という声掛けがあった。

オバチャンの屋台には、毎朝テーブルが3組しつらえられ、15名ほどがそこに座って食べる。しかし、その安さとボリューム、そしてオバチャ



写真②ムギラ

ンの作るメシの旨さからだろう。近くの家から大きなホーローの鍋を持って家族分を買いに来る人たちも少なくない。そのようなわけなので、目の前で食べている客の数以上にオバチャンの屋台で腹を満たしている人は多いのだ。

ある日、私はいつものように一皿を頼み、テーブルに座って静かに牛皮メシを食べていた。基本的にスプーンを付けてもらうのだが(手で食べるには熱すぎるので)、そのスプーンはブリキ製だ。ブリキはご存知の通り、アルミ製品に比べると非常に曲がりやすい。そして、その日の牛皮はいつも以上に固く、ブリキ製のスプーンを曲げないように、細心の注意を払っていたつもりだった…しかし、スプーンは曲がるどころか、ポキッと音をたてて折れてしまった。絶望的な気分で、オバチャンに謝罪するが、「外人はスプーンをまともに使えないのか」とひとしきり怒られて、新しいアルミのスプーンに替えてくれた。その後、僕はオバチャンの中でスプーンすら使えない奴になったからか、ようやく常連客として認められたからかはわからないが、トロトロの柔らかい牛皮を盛ってくれるようになった。そして、これがとてつもなく旨いのだ。

また別の日に何人かの日本人を伴ってオバチャンの屋台を訪れた時のことである。早朝から脂ぎった山盛りのメシを食べさせられて、一緒に来た人たちからは「朝メシにしては重すぎ

る」とクレームの嵐。私たちがこのように色々と言いつつながらノロノロと食べていると、「ほかのお客さんが待ってるから食べたら帰りなさい!」とやはり怒られる。このような光景はこの日だけでなく、また、私たち外国人に対してだからというわけでもない。議論が盛り上がったブルキナベ<sup>3</sup>に対しても頻繁に投げかけられるオバチャンのセリフだ。アフリカとは言え、一国の首都ワガドゥグの朝はみな忙しいのだ。

### 嚴母の優しさ

こんなオバチャンなので、写真を撮らせてくれなどと頼めるわけもない。自分の皿の写真を撮るのには怒られたことはないが、無謀にもオバチャンの写真を撮ろうとした私の知人たちは悉く撃沈している。とにかく、ぼんやりと食事をしていると怒られるので、最初に述べたように、頑固おやじのラーメン屋よろしくサッと注文をし、サッと食べ、きれいにして帰る。この屋台はそういうところなのだ。

しかし、都度の滞在初日にこの屋台を訪れると、嚴しい顔つきで仕事をするオバチャンがにっこりして「ボナリベ(ようこそ)」と言ってくれる。そして、頼んでもいないのに、私が注文したよりもはるかに多く盛った「メシ」と何枚か余分に牛皮を盛ってくれて歓迎してくれる。おかげで

初日の午前中はいつも以上に腹が重くて困ってしまう。おっさんとなった愚息のメタボな腹回りを気にする実家の母とは若干方向性が違うのだが、母の愛に触れたような気がして、なんだかほっこりして一日を過ごすことができるのである。

清水貴夫

<sup>1</sup> 田中樹(編) 2017年3月『フィールドで出会う 風と人と土』(総合地球環境学研究所に収録)

<sup>2</sup> 「牛の皮」は屠殺した牛の皮を天日で干して板状になったものを水でもどしてから調理する。牛はブルキナファソの北部、マリやニジェールの牧畜民フルベが生産したもので、肉あしらいがうまいとされるハウサの職人によって乾燥した牛の皮が作られる。以前は西アフリカの乾燥地と海岸部との交易の重要な品目であったとされている。

<sup>3</sup> ブルキナファソ人のこと。ブルキナファソは1984年の国名変更の際に、ブルキナファソの3大民族の言語を「ブルキナ(モシ語): 誇り高き」、「ファソ(ジュラ): 人びと」、「ブルキナベ: 「ベ」はフルベ語で「…人」と振り分けて民族の融和を象徴した。

## 市場での出会いとお弁当

「初の海外調査の地であるインドで、一人で行動する日に食べたお弁当のことを忘れることはありません！」と今でも胸を張って言えます。市場のお弁当の話にたどり着くまで、色々ありました…。

### そうだ市場に行こう

調査も終盤に差しかかったある日の晩、突然、一人で過ごすことになりました。二週間ほど何事もなくインドに滞在していたとはいえ、いきなり一人で過ごすとなると心細くなりますし、不安も覚えます。ただ、普段よりも多めのお金を払ってホテルで食事をして、冷房の効いた部屋で仕事をすれば、ホテルの外に出ることなく一日過ごせます。また考え方を変えれば、なれない異国での現地調査でたまりにたまった疲れをとるには良い一日です。「なんとかなるな」と考え、その日は眠りにつきました。

気持ちよく晴れ渡った真夏日のある日、冷房のよく効いた部屋で、一人きりの一日が始まりました。朝食を終え、部屋で過ごしていると気持ちがムズムズし始めました。私は仕事が嫌いなわけではありません。冷え性なわけでもありま

せん。テレビが嫌いなわけでもありません(テレビは電波の受信が不調で視覚的内容がよくわかりませんでした…。)部屋の中で考え事をしていると、ヨーロッパで行われた学会で一緒にいた先生の姿を思い出したのです。

学会終了後、何人かで会場の近くを散策し、市場(蚤の市?)を歩きました。その先生は、珍しい野菜やおいしそうなお菓物を見つけると次々に買い始めたのです。英語が通じない店主には、現地の通貨を手のひらに載せて、“信用”取引をしていました。「食べてみないと、良い悪いはわからないでしょ」というようなことを仰っていたのと、その豪快な信用取引がとても印象的でした。気持ちのムズムズの原因は、この思い出でした。

私は市場を目指すことにしました。頭の中では、私たちのような旅行者<sup>1</sup>が、開発途上国の大衆レベルの生活を見ることはそうそうないと思っていました。しかし、熱気と活力がみなぎるインドの町や村を往復していると、人々の日常生活が見てみたいと思うようになっていました。そのような思いを胸に、私はホテルから出て、車やバイク、人にぶつからないように砂埃が舞う中をテクテク歩きだしました。市場へ向かう道中では、信号や横断歩道がない片側3.7車線<sup>2</sup>の道を、現地の人やドライバーさんたちの好奇の視線を浴びつつ<sup>3</sup>、無事に渡りきりました。前日にスコ



ルのような雨が降っていたので、水たまりがたくさんありました。インドでは道路があらゆる生活の場になりうるので、私は水たまりの水も感染症の原因なるかもしれないと考え、現地の人には考えられないような回り道をしながら、“恐るべき”水たまりを避けてテクテク歩きました。ドラドラ歩いていると悪い人に声をかけられたり絡まれたりすると思い、早足でテクテク歩き、なんとなくあのあたりだろうと見当をつけていた市場に到着しました。

### 市場の色彩豊かな光景

広大な敷地の中に市場がありました。市場の中は、水はけの悪い土で覆われていました。前日の雨の影響が残っていたので、ここでも水たまりは私の極力避けるべき対象物となりました。しかし、車の往來を気にせずに自由に歩き回れる空間に、ホッとしました。市場の中は区画ごとに大きく区切られていて、店が整然と並んでいました。野菜ゾーン、肉ゾーン、日用品ゾーン、駄菓子屋(?)ゾーンという感じでした。大部分は、野菜ゾーンでした。車の往來が激しい埃っぽい道を歩いてきた私にとっては、その野菜ゾーンの色彩はとても魅力的に感じました(写真①、②)。次の写真はバナナ屋さんで、単色ですが、ディスプレイの仕方が日本のスーパーではまず

見られないので、私には印象的でした(写真③)。

綺麗に土が取り払われた野菜が並んでいました。調査で大半が土色だった半乾燥地を行ったり来たりしていた私にとっては、このような色彩豊かな野菜が並んでいる光景はオアシスのようでした。ぶらぶら歩きながらそのような光景を眺めていると、この野菜はどこから来ているのか疑問が湧いてきました。店番の人に野菜の栽培地を何度か聞いてみましたが、言葉が通じないことが続いたので、最終的には質問せずに、ニコニコ笑いながら市場をぐるぐる回っていました。

そうこうしていると、葉物野菜のキャベツを売っている店を見つけました。根菜よりも傷みやすそうなイメージの葉物野菜を見つけたので、このときばかりは言葉の壁を気にせずに、「どこで栽培しているか」お店の人に聞きました。お互いイメージを膨らませながらコミュニケーションをとっていると、周囲に人がどんどん集まって来て、ただ事でない様子になりドキドキしました。すると、どこかのお店の裏で働いていた高校生か大学生ぐらいの青年が英語で話しかけてくれました。あまりにも私の現地語でのコミュニケーション能力が低かったため、集まって来た人たちが英語を話せる人を探してきてくれたのです。ようやく、「どのあたりで栽培しているのか知りたい」とか、「栽培用の水はあるの?」など、色々聞くことができました。若い人



写真①綺麗に土が取り払われた野菜たち

25



写真②市場の色彩を豊かにする野菜の赤や緑

は英語が話せる人が多いです。コミュニケーションがとれ始めると、キャベツ売りの店主らから質問攻めにあい、その後は終始お店の人のペースで物事が進みました。

### 陽気な店主との出会いとお弁当

キャベツ屋の二人はとても陽気で親切でした(写真④)。「どこから来た？」から始まり、「スマ

ホを持っているなら写真撮らないかい？」と言って、ポーズをとってくれたりしました。「ヤシの実ジュースを知っているか？」と聞いてきて、突然「ビデオ、スタート！」と叫びだし、売り物であるヤシの実を硬い岩にガツンとぶつけて、できた穴からほとばしるヤシの実ジュースの一気飲みを見せてくれました。ヤシの実ジュースを一滴もこぼさず、ジュースが滝のように落ちていく様子が分かるようにヤシの実を高く持ち上げ、口を



写真③売り物のバナナと店主の女性



写真④陽気で親切な店主たち

大きく開けて飲み干すその手際の素晴らしさにとても感心しました(ひょっとして取材慣れしている??)。その後も彼らとの会話は続きました。私の感じたインドの素敵なところを話していたときに、食事がおいしくて仕方がないということをやったら、「俺たちのお弁当の味は知らないだろう?」といい、お弁当を差し出してくれたのです(写真⑤)。店主が今日食べるお弁当だと言われたので遠慮したのですが、結局は店主のご厚意に甘えてお弁当を頂くことにしました。

差し出されたのは、新聞紙に包まれたお弁当でした。最初に私が食べたインドのお弁当とは少し違って、バナナの葉ではなくビニール袋に包まれており、カレーソースの小袋はありませんでした。ご飯は既にカレーソースのようなものとの混ぜご飯風で、ご飯の上にゆで卵が一つ乗っていました。スプーンも一緒に渡してくれたのですが、私は店主のお弁当に敬意を払い、現地の流儀にのっとって食べました。みんなの視線を浴びながら右手でご飯を食べ始めると、

27



写真⑤実際にいただいた八百屋さんのお弁当

周りから笑い声を含めた歓声のようなものが聞こえてきました。何を言っていたかは定かではありませんが、身振りや手振りを見ていると「あの日本人、俺たちとおなじように手で食べているよ」とでも言っていたようです。これは、日本人が外国人の箸使いに感心するようなことと似ていたのかもしれませんが。「おいしい、おいしい!」と私は観客たちに言いながら食べました。リップサービスではなくて、本当においしかったです。ビニール袋にご飯は包まれていましたが、ジュークジュークのご飯ではありませんでした。味はまるでカツオ出汁をとっているかのように和風風味のカレー味で、辛さも程よく、私のおなかにもう少しスペースがあればおかわりもしたいぐらいのおいしさでした。ゆで卵と和風カレーご飯の相性も抜群で、「少し辛みが強くなってきたな～」と思ったタイミングで、卵をかじると程よく辛みが中和され、またご飯に文字通り手を伸ばしてしまいました。

お弁当を食べた後は、お土産としてキャベツを一玉もらって帰りました。店主からはなにもかももらってばかりとなったため、一人になった私を市場に行こうと突き動かしたある先生の取引の姿とはほど遠いものとなりました。しかし、市場の陽気な店主たちとの出会い、リアルな家庭の味のお弁当、緑鮮やかなキャベツ、一人で過ごしたこの日は何事にも代えがたい思い出となりました。

た。この三カ月後に再び現地を訪れることになったのですが、日程の関係で市場を訪れることは叶いませんでした。いつか、あの人たちと“信用”取引を成立させることを夢見ています。

荒木良一

<sup>1</sup> 今回は旅行ではなく、お仕事です。

<sup>2</sup> 本当は片側3車線ですが、ドライバーさん達の空いているスペースを見つけてどんどん割り込んでくる技術で0.7車線ぐらい増えているのです。

<sup>3</sup> 車・バイク社会ですので、暑い日中に外国人が歩いているのはとても珍しい光景です。

## デーツの名産地 — サハラのおアシス都市ビスクラ —

デーツって何？

デーツという果実を知っていますか？デーツとはナツメヤシという植物になる実のことです。つまり「ナツメヤシの実」ということになります。日本ではそれほど馴染みはありませんが、近頃では輸入食品のお店でも買うことができます。

デーツを実らすナツメヤシには植物学的にもいろいろ特徴がいくつかあります。雄と雌があること（雌雄異株）、寒さに弱いこと、幹の先端にしか成長点がないため、その部分を切ってしまうと枯れること、寿命が70—80年と長いこと、などです。

ナツメヤシの起源はペルシア湾岸と考えられています。そこから東と西へ、砂漠地帯のおアシスを伝って拡散していきました。東はインドのタール砂漠、西はモーリタニアの砂漠地帯まで、多くのおアシスでデーツが生産されているのです。

20世紀になると、アメリカ、南部アフリカの乾燥地でもデーツが生産されるようになりました。最近ではインド南部でもナツメヤシ農園を見かけることができます。

砂漠のおアシスでは雨がほとんど降りません。そんなところで、どうしてナツメヤシの栽培が可能なのか。その理由は、地下水を集めるための水路にあります。アルジェリアのおアシスでは「フォッガーラ」と呼ばれます。地中に横に掘られたフォッガーラの水が、地表にでたところにナツメヤシ農園があります。人々は貴重な水を分け合って、生活用水やナツメヤシへの灌漑に利用してきました。またおアシスによっては湧水を利用することもあるし、比較的雨が深いおアシスでは、川の水を引いて灌漑に使う場合もあります。最近では井戸を掘り、ポンプで水をくみ上げるところも増えています。

こうしてつくられるデーツは、基本的に熟して乾燥させたものをそのまま食べるのが多いのですが、料理に使い、甘みを出すこともあります。デーツは独特の風味と味をもっていますが、あえてたとえれば「干し柿」の食感に近いといえます。

### デーツの大産地ビスクラ

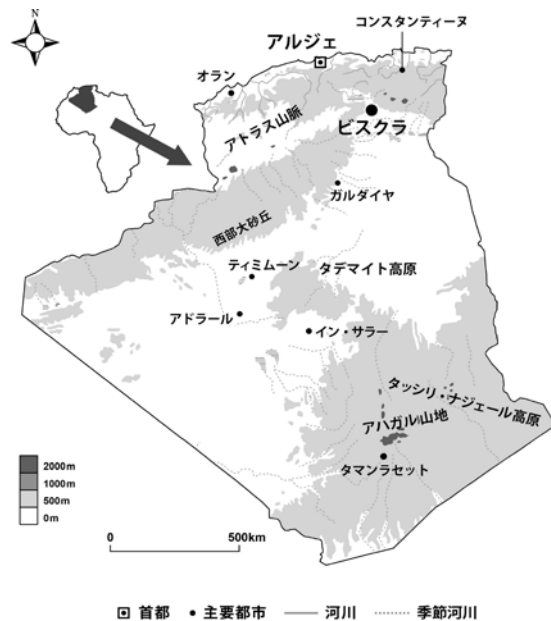
私は2009年からサハラ砂漠の小さなおアシスに通い、人々の生活や農業、それらの変化について調査を進めてきました。サハラに点在するおアシスには、人口数百人程度の小さなものもあれば、数十万人規模のおアシス都市もあります。

最近私が通い始めた、サハラの北部に位置するアルジェリアのビスクラというオアシス都市の人口は30万人を数え、かなり大きなオアシスということになります(図①)。

ビスクラ一帯はデーツの大産地としても有名です。アルジェリアは、1830年以降フランスによって植民地化されました。その植民地時代にビスクラがナツメヤシの生産地として発展したのです。ビスクラはサハラの北部にあり、地中海沿岸の

人口が多い地帯までの距離が比較的短く、輸送に便利なこと年間の降雨量が100mm程度で、地下水が抱負であったことが理由として考えられます。

ナツメヤシは品種が多く、アルジェリア国内だけでもおよそ1000品種が確認されています。しかし、ビスクラで栽培されるナツメヤシの大半はデグレット・ヌールという品種です。デグレット・ヌールが導入された主な理由は、デーツの生産性が高いことによります。デグレット・ヌールの1本あたりの生産量は50～80kgといわれ、他の品種よりも格段に多いのです。



図①ビスクラの位置

## 収穫シーズン

デグレット・ヌールの収穫期は10月から11月です。この時期、どの農園でも人々が忙しく働いています。

アブデルラティフさんはビスクラでナツメヤシ農園を持っています。実はアブデルラティフさんは、弁護士の資格も持っていて、午前中はナツメヤシ農園で、午後は弁護士として働いているのです。以前は、もっぱら弁護士として働いていたのですが、どうしてもナツメヤシの農園をしたくて、農地を買ってナツメヤシ栽培を始めたそうです。収穫期には数人の季節労働者を雇い、忙しい時期を乗り切ります(写真①)。

まず重要なのは、ナツメヤシに登って収穫をする人、そして収穫されたデーツを地面で受け取ってトラックまで運ぶ人、さらに農園の作業場でデーツの房をきれいに整える人です(写真②)。

こうした一連の工程を経てデーツが売られていくのです。ビスクラ周辺には、デーツを軒先に吊るして販売する店が多数あります(写真③)。また、郊外の市場にはデーツを売り買いする人たちが集結します(写真④)。こうして、デーツは首都のアルジェや大都市に運ばれていくのです。

## 輸出されるデーツ

ヨーロッパの食料品店や市場を覗くと、デーツが売られている光景をよく目にします。その中にはアルジェリア産のデーツもあることでしょう。

ただ、日本でアルジェリア産のデーツを見ることはまずありません。サハラ・オアシスの研究を始めて以来、私は店でデーツを見かけると、産地を確認する癖がついてしまいました。チュニジア産、イラン産、アラブ首長国連邦(UAE)産の



写真②ビスクラ近郊に広がるナツメヤシ農園



ものが大半を占めているようです。アメリカ産、イスラエル産も時折見かけることがあります。

2011年に世界で生産されたデーツはおよそ800万トンでした。これは日本のコメの生産量とほぼ同じです。この年、もっとも多く生産した

のはエジプトでおよそ140万トン、アルジェリアは5位でおよそ70万トンでした。

ただ、日本人は多くのデーツを食べているとは言えません。ちょっと古い統計ですが、2006年のデーツ輸入量はおよそ1000トンでした。加工



写真②アブデルラティフさんの農園での収穫



写真③デーツの房を整えるアブデルラティフさん



写真④デーツが取引される市場

用のものを計算に入れなかったら、日本人1人あたり、1粒のデーツしか食べていないことになります。

日本人がデーツをもっと食べてくれたら、オアシスに興味を持つ人も増えるのではと、私は期待しているのです。

石山俊

33



写真⑤デーツの売り買いで賑わう市場

## サヘルのウシはいつ眠る —ブルキナファソ、サヘル地域の牧畜民 フルベの事例—

機会は突然おとずれた。2015年12月に9年ぶりにブルキナファソへ渡航することになったのだ。

そのころの私は、2012年から所属していた総合地球環境学研究所の「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクトで、インド班の一員としてラージャスターン州およびタミル・ナードゥ州で、牧農業共存社会の在り方を探ることを目的とした調査に励んでいた。そして、かつての調査地ブルキナファソで調査する同僚を羨ましそうに眺めていた。それは、私が調査をしていたT村はブルキナファソ北東部ウダラン県というところにあり、イスラム過激派の活動拠点に地理的に近いため、外務省の海外安全情報で最高レベルのレベル4（退避勧告）が出されている危険地域で、調査できない状況だったからだ。しかし、レベル2の地域も多いことから、何らかの方法があるのではないかと虎視眈々とブルキナファソで調査する機会をうかがっていた。

## ことのはじまり：放牧経路のGPS計測 (2001年—2007年)

2001年4月から2007年3月にかけて『西アフリカ・半乾燥熱帯圏のミレット農耕と家畜・休閒植生・土壌の共生的連環』というテーマで博士研究をおこなっていた。その研究の一部として、GPSを用いて、乾季にT村を訪れる牧畜民フルベの放牧経路やキャンプの移動、牛糞の散布域を計測していた。当時用いていたGPSはガーミン(Garmin)社のポータブルGPSで、たしか3万円程度であったが、少ない研究予算の中から数万円するGPSを複数個購入するのは至難の業であった。

そんなに高価なGPSにもかかわらず、放牧経路を計測するには様々な問題があった。まず、そのGPSは単三電池2本で動くのだが、放牧経路をトラック(軌跡)データでとろうとすると常時電源を入れておく必要があり、そうすると電池の寿命が24時間持たない。電源を入れておいても、その間のデータがしっかりと取れていないことがある。これはGPSの問題ではないのだが、そんなに高価なGPSをウシにつけておいて砂丘の中に落としてきたら、それこそ砂漠の中で1本の針を探すようなもので、元も子もないので、牧夫に携帯してもらい計測していた(写真①)。そのため、時折、牧夫の行動がGPS

データとして現れる。また、この手段は滞在時に毎日電池交換し、データを吸い上げることで継続的な計測ができるが、不在時には、電池交換とデータ吸い上げができないため、計測をおこなうことができないという致命的な問題があった。このように色々問題があるGPSを効率良く使おうとすると、なるべく長時間のトラックデータをとるために、放牧に出る直前の牧夫にGPSを預けて回る必要があった。そこで、私はブルキナファソでのパプであり、通訳であ

り、村のデレゲ（日本語では代表となるが、顔役といった感じ）である Maiga Tahiri Yamba 氏と共に、放牧に出る前の牧畜民フルベのキャンプを毎日回り、電池交換と簡単な聞き取り調査をおこなった。（写真②）。

牧夫らに1日の行動を聞くと、朝の搾乳と昼過ぎの水遣りはほぼ同時に毎日おこなうが、日帰り放牧は毎日同じ時間に同じところへ行くわけではないことがわかった。また、放牧は日中ではなく夕刻以降におこなわれていた。では、ウシは



写真① GPS を持ってウシの放牧をしている牧夫（2004）

いつ眠るのだろうか。先述したように、GPS を携帯していたのは牧夫であり、ウシそのものの行動がGPSのトラックデータとして計測されているのではない。また、24時間完全にデータが取れていないことから、行動にも空白があった。



写真②インタビューをしている Maïga Tahiri Yamba 氏 (2004)



写真③ Maïga Tahiri Yamba 氏とその息子 (2015, I.M.さん撮影)

サヘルの子牛はいつ眠るのかという疑問を残したまま、ブルキナファソでの調査は2007年3月幕を閉じた(写真③)。

### 希望が見えた：放牧経路の GPS 計測 (2013年－2017年)

2013年から、インド、ラージャスターン州およびタミル・ナードゥ州で、牧農業共存社会の在り方に関する研究の一環として、家畜の放牧をGPSを用いて計測していた。先ほどまでの話から10年以上もたっており、価格もサイズもお手軽なポータブルGPSが販売され、また、学生時代には存在自体知らなかったが、知っていたとしても予算の都合から使うことができなかった首輪GPS(動物に装着するGPS)を用いていた。しかも、この首輪GPSは、こぶし大のバッテリーを使うことで、1年間継続してトラックデータが計測できるという代物である。T村に訪れる牧畜民のウシにこの首輪GPSを装着できれば、1年間どのように遊牧しているかわかるのではないか。インドで首輪GPSでの計測に慣れ始めた私は、どうすれば危険地域での首輪GPS計測が可能か構想するようになった。

## 渡航にむけて

課題は山積していた。予算の面ではブルキナファソまでの渡航費、首輪GPS購入費、ロジ面では危険地帯にいるウシに誰が首輪GPSを装着するのか、装着しに行ったとして牧畜民が承諾してくれるのかなどである。構想から1年経ったある日、ついにそのチャンスがおとずれた。年度末に向けてプロジェクトの残り予算を計算した所属プロジェクトのリーダーが、「予算に少しゆとりがあるので新規展開の研究あるいは調査拡張の案はないか」というのではないか。また、首輪GPSについてはラージャスターンで使用していたものとザンビアで調査していた同僚が転職したため、使わなくなったものが利用できる状態になっていた。残す課題はロジ面だけである。そこで、「T村出身で首都ワガドゥグのNGOで働いているI.M.さんをお願いできないかな」とブルキナファソの比較的安全な地域で調査をしている同僚Sさんに相談したところ、「大丈夫でしょ。彼は宮崎さんに恩義があるので」と返答された。『そうなのか、まったく身に覚えがない。知らぬまに恩を売っていたのか』善は急げと早速FacebookのMessengerを使って相談してみたところ、I.M.さんから快諾が得られた。こんな風に、簡単に現地と連絡が取れるなんて2007年には考えられなかったことであ

る。あとは牧畜民が承諾してくれるのだが、これに関しては行ってみないとわからない。というのは、彼らは遊牧生活を送っており、先ほどのI.M.さんの場合とは異なり、携帯やインターネットなどのネットワーク環境がないことのほうが多いからである。そもそも、私がブルキナファソを離れたころには携帯もそれほど普及しておらず、彼らの連絡先がわからない。最大の課題を残しながらもリーダーに相談してみた。サヘル地域の牧農共存社会、遊牧の現状を把握することはプロジェクト上大きな功績となるが、やはり安全面とロジ面で不安があったようだ。しかし、Sさんの後押しもあり、現状を良く知るSさんと同じ日程で渡航し、行動することを条件に承諾された。Sさんが渡航するのは牧畜民フルベがT村を訪れ始める乾季初旬の12月で、GPSの設置にも好都合であった。すべての幸運がつながり、9年ぶりにブルキナファソでの調査が可能になったのは2015年11月のことである。

## 首輪GPSの装着

12月のブルキナファソでの滞在期間は7日間。その間に首都に住む協力者のI.M.さんと打ち合わせをし、彼がT村へ行き、訪れている牧畜民フルベの家畜に首輪GPSを装着し、簡単

なインタビューをおこない、戻ってくる。そして、報告を受け、来年度のGPSの回収に向けて更なる打ち合わせをする。という、いたってシンプル簡単な仕事である。が、何度も書いているようにフルベが家畜にGPSを装着させてくれるかが課題である。I.M.さんとの打ち合わせの結果、I.M.さんだけではフルベとうまく交渉できない可能性もあるので、以前、私と共に調査していたT村のデレゲ Maïga Tahiri Yamba 氏に同行してもらうことになった。彼がT村へ

発ち、Sさんと別調査をしている間もT村での交渉が気になった。首輪GPSはウシ用9個、ヤギ・ヒツジ用4個の全部で13個を彼に託していた。移動に1日ずつ取られるのでT村での滞在期間は3日間、いったいいくつの首輪GPSを装着してくることができるのだろうか。もしかして…。そんなことを考えながら彼の帰還をまった。帰国日にI.M.さんがホテルに現れた。「どうだった？」彼はにやりとしながら、「全部装着できたよ」とこたえた(写真④)。彼が言う



写真④ GPS をウシに装着する牧畜民フルベのO.M.氏(2015, 撮影:I.M.さん)

には、牧夫たちが僕のことを覚えており、みんな快く引き受けてくれたそう。また、お土産として託していた我が家の家族写真にも、「彼は元気にしていたか。子どもが2人もできたのか」と喜んでくれたらしい。なんともいえない気持ちになった。でも、ひとつだけ気がかりな報告を受けた。私のブルキナファソのパパ（Maïga Tahiri Yamba 氏）の体調がよくないとのことである。最初の1日はI.M.さんと一緒にフルベのキャンプを訪問して回ってくれたらしいが、

彼の体調を気遣って、それ以降の同行を断ったそう。心配である（写真⑤）。

### 首輪GPSの回収

調査には常に不安がつきもので、次々と心配事がわいてくる。首輪GPSが装着できた今、心配なのは、首輪GPSをちゃんと装着したままにしてくれているか。インド調査では、途中で首輪GPSを外されていることが数回あった。1年後



写真⑤ Maïga Tahiri Yamba 氏とその家族（2015、撮影：I.M. さん）



の回収時に、首輪GPSをつけたフルベがT村へ来ているかも気がかりである。彼らは遊牧生活を送っているので、その年の降雨や植生の生育状態によっては、T村を通過せずに他の地域でキャンプを設置する可能性がある。こればかりは運を天に任すほかなかった。それでも、現地との連絡が必要であろうと定期的にI.M.さんにメッセージを送り、問題が生じていないか、フルベからの不満が届いていないか、あわせて、パパの身体はその後どうか問い合わせた。そのたびに、特に問題はないとの回答だった。

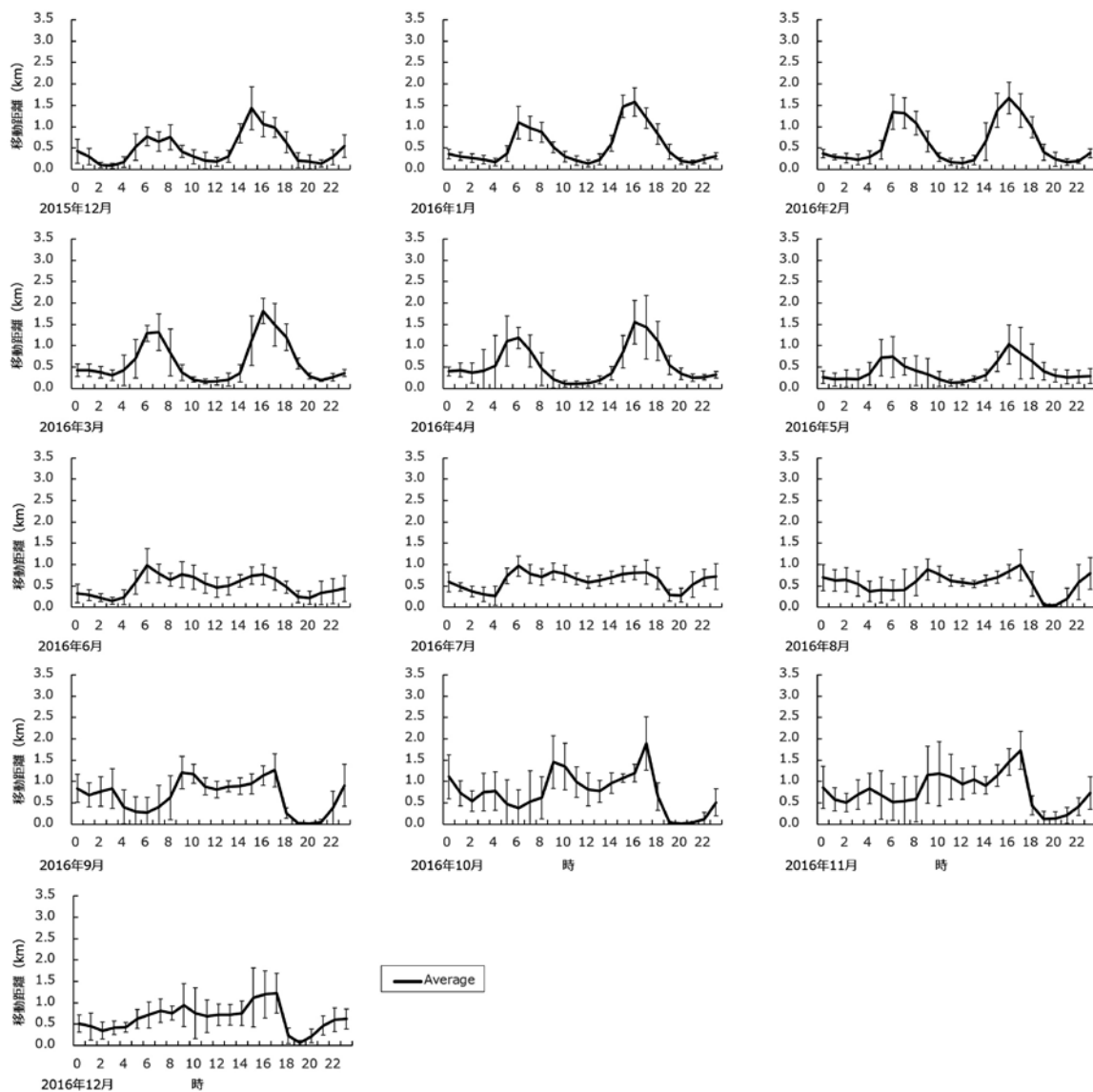
その他の調査の都合もあり、ブルキナファソへの渡航はちょうど1年後の2016年12月に決まった。時期としては電池が切れるころであり、フルベがT村を訪れる乾季初旬でちょうど良い。心配なのはI.M.さんが回収に行ったときに、全13世帯のフルベがちょうどT村に居るかであった。渡航日程が決まった11月にI.M.さんに確認したところ、15日のT村からの情報ではフルベはまだ1世帯もT村には来ていなかった。不安を抱えつつも再度ブルキナファソへ渡った。前年同様、聞き取り調査の内容の打ち合わせをし、I.M.さんはT村へと向かった。5日後に首都に戻ってきたI.M.さんはすべての首輪GPSを持っていた。2世帯を除く11世帯はT村を訪れており、すんなりとGPSの回収と聞き取り調査ができたようだ。残りの2世帯

だが、ひとつは村から南東に約10km離れた、もうひとつに到ってはこちらも南東に約50km離れたニジュール国内にキャンプを設営していたらしい。よくすべて回収してきてくれたものだと感じた。

## サヘルのウシはいつ眠る

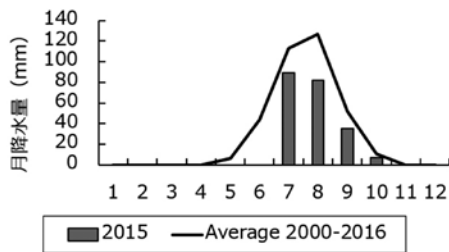
さて、首輪GPSの設置と回収は、課題や心配をよそにとんとん拍子に調査は進んだ。しかし、データを見るまでは安心できないのがフィールドワークである。しっかりとしたデータは取れているのだろうか。完璧にしたつもりでも、ちょっとしたミスをしており、まったくデータが取れていないなんてことが起こる。しかし、これもまた研究である。すべての首輪GPSからデータを吸い上げ、白地図に落とし、1世帯ずつ放牧経路を確認して歓喜した。とてもきれいなデータが取れていたからである。研究ってそんなにうまくいかないのと突っ込まれるかもしれないが、何らかの凡ミス、トラブルはつきものなのだ。もしかしたら僕だけかもしれないが…。いや、共感してくれる人も多いはずだ。

話をウシの睡眠に移そう、このエッセイを書くにあたり、ウシってどれくらい寝るのだろうかと思いついてインターネットで検索してみたところ、多くのサイトで、長時間睡眠するのではなく、何度も



図①各月における1時間あたりの移動距離

うたた寝をする動物で深い眠りにつかないとされていた。さらに、重要なことに気づいたのだが、首輪GPSは位置情報をレコードしているだけであり、細かな状態までは把握できないのである。したがって、ここでは、睡眠≒横臥あるいは休息と拡大解釈することとした。首輪GPSの設置期間は2015年12月25日から2016年12月12日までの354日間であった。T村は半乾燥熱帯地域で、雨季は6月から9月、10月から5月は乾季となる。T村で計測されている降雨データより2000年から2016年までの年間平均降雨量は352.9mm、首輪GPSを設置していた2016年の降雨量は247mmであった(図①)。年降雨量300mmの等雨量線がこの地帯の主要な食糧作物であるトウジンビエが栽培できる限界を示す“飢餓前線”(門村, 1991)とされるので、2016年は食糧生産するうえで非常



図②T村の2016年の月別降雨量と平均年間降雨量

に厳しい年であったといえる。

ウシに装着されていた首輪GPSの位置情報をもとに、時間毎の平均移動距離とそのばらつき(標準偏差)を月別に示した(図②)。これらの図は、大きく分けると前半(2015年12月から2016年5月)と後半(2016年6月から2016年12月)でグラフの形状が異なる。前半は山が2つ、谷が3つのM字型で後半はMの字が崩れ谷間がなくなり台形型である。後半部分をもう少し詳しく見ると、2016年8月から2016年12月に19時ころから22時ころにかけて大きな谷となる特徴が見られる。ここでは睡眠≒横臥あるいは休息と拡大解釈するので、首輪GPSの位置情報があまり変化していないとき(GPSの機能上GPSが動いていなくても時折位置情報が動くことがあるため)、すなわち、時間毎の移動距離が短いとき、値が0に近いときに、ウシは睡眠≒横臥あるいは休息していることになる。1年を通じて、ウシは19時ころから22時ころにかけて睡眠していた。また、2時から4時にかけても睡眠しているときが多いといってもいいのではないだろうか。特徴的なのは、2015年12月から2016年5月にかけてのM字の谷の部分で後半には大きな凹みが見られない。これは、食料となる飼料の少ない乾季には1日の中でも気温の高くなる時間にはあまり行動せずに、体力やエネルギーの消費を軽減するためなのかもしれない。

あとがき

2017年1月14日にブルキナファソのI.M.さんからパパ(Maïga Tahiri Yamba 氏)の体調がすこぶるよくないと連絡があった。どうすることもできないので、病院へ行くお金や薬を買うお金が必要であれば、予備調査費としてI.M.さんに託してきたお金からご家族に送ってくれと頼んだ。その後、連絡が無かったので回復したのだろうかと思っていたら、つい先日、2017年8月15日にパパが亡くなったと連絡があった。76歳だった。

43

とんとん拍子に話しがすすみ、ブルキナファソでの調査は本当にすべてがうまく進んだ。ブルキナファソを離れて9年、結婚し、子どもを3人(2015年の渡航から2016年の渡航までの間にもう1人男児が誕生)もうけた姿を、写真を通じてではあるがパパにみせることができた。また、彼と彼の家族にも写真を通じてではあるが会うことができた(写真⑥)。もしかすると、ブルキナファソでの調査はなにか虫の知らせのようなものだったのかもしれない。ありがとう、パパ!

Maïga Tahiri Yamba 氏に感謝と哀悼の意をこめて

宮寄英寿

[引用文献]

門村浩・武内和彦・大森博雄・田村俊和(1991):  
『環境変動と地球砂漠化』朝倉書店,東京.p.276



写真⑥ 2015年にとった家族写真と Maïga Tahiri Yamba 氏 (2016, 撮影: I.M. さん)

## ガーナの子どもと何して遊ぶ？ — トロトロごっこことだるまさんが転んだ —

### サバンナの熱い太陽

私は西アフリカのガーナの村で、住み込みで調査をしている。調査村のひとつは、ガーナ北部アッパーウェスト州ロウラの町の近く、農耕民のダガーレという民族が暮らしている村だ。

この村は湿潤サバンナに位置している。3月半ばから10月半ばまでの7カ月間が雨季、10月半ばから1月までが比較的涼しい乾季、2月から3月までが暑い乾季となる。サバンナの日差しはとて強く、とくに雨季の日中は気温も湿度も高い。冷房のない村では、汗がとめどなく流れる。村の人たちは涼しい朝のうちに畑に向かい、午前中いっぱい農作業をして、日が高くなる正午過ぎに家に帰る。昼下がりの暑さから逃れ、涼しい木陰で心地の良い風を受けて休憩する(写真①)。

2014年から2015年にかけて、私は2度この村に滞在し調査をおこなった。村にいるあいだ、私は村人の家を回って世帯調査をしたり、畑に行き村人の農作業の様子を観察したり、女性のもとで料理について調査したりする。調査は村の人びとに手伝ってもらっているのだから、村に暮らしているあいだは私も村人と同じリズムで

生活をする。午後は村人とおしゃべりをしながら休憩したり、家で昼寝や読書をしたりして、ゆっくりと過ごす。

小学校には、昼過ぎに長めの昼食休憩がある。子どもたちは昼食を食べるために帰宅して、15時くらいに学校に戻って午後の授業を受ける。私のホストファミリーの子どもたちはサバンナの暑さをもとせず、お昼過ぎになると追いかけてこをしながら家に帰ってくる。荷物を自分の部屋に放り込むと、いつもその足で私の部屋を訪ねてくる。毎日ではないが、この時間が私と子どもたちが一緒に遊ぶ時間になる。サバンナの昼下がり、子どもたちはサバンナの熱い太陽の下に私を引っ張り出す。

### ガーナの子どもの昼下がり

ガーナではサッカーが人気だ。レストランやテレビのある家に近所の人びとが集まって、みんなでサッカー観戦をする。その影響もあって、子どもたちは小さな子から大きな子までサッカーが大好きだ。サッカーボールは高級でなかなか手に入らないが、道端で拾ったビニール袋を幾重にも重ねてボールをつくり、ゴールの代わりに地面に線を引っ張ってサッカーをする。私と遊ぶときも手づくりのボールを使って、みんなでサッカーをして遊ぶことが多い。

2～4才の小さな子どもたちも、お兄ちゃんお姉ちゃんに混ぜてもらって一緒にサッカーをする。しかし、体が接触することの多いサッカーでは、年上の子に体の大きさでも力でも負けてしまう。小さな子はほかの子にぶつかって転び、泣いてしまうことも日常茶飯事。足の速さでも到底かなわない。小さな子たちは、最初は一緒になってボールを追いかけて楽しんでいるのだが、そのうち飽きて違う遊びを始める。

子どもたちは、体を動かす遊びだけでなく、トランプや石を使ったゲームでも遊ぶ。ここでも小さな子どもたちは、お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒に遊ぶのは難しく、そのうち姿を消してしまう(写真②)。

ある日の昼下がり。私と子どもたちとでサッカーをしていると、小さな子どもたちはサッカーに飽きてどこかに行ってしまった。そのうち私も強い日差しの下での激しい運動に疲れてしま



写真① トウモロコシの収穫作業を終え木陰で休憩する村の人びと

い、木陰に逃げ込んだ。最初は木陰から子どもたちがサッカーをしている様子を眺めていたのだが、ふと小さな子どもたちは何をしているのか気になって、木陰を離れて小さな子どもたちを探した。しばらく歩くと「ピッピー」「ブーン」という声が聞こえてきた。声のする方に行ってみると、小さな子どもたちは家の横に置かれた大きな木材にまたがって遊んでいる。先頭に座っている子は「ブーン、ピッピー!」と言って木の

枝を両手に車を運転しているような仕草をし、前から2番目に座っている子は「アクラ!アクラ!」と叫んでいる。アクラとはガーナの首都だ。これはもしやと思い「メイトさん、トロトロですか?どこ行きですか?」と聞いてみた。すると前から2番目に座っている子が「そうだよ!アクラ行きだよ!」と教えてくれた。

ガーナの街中では、たくさんのバンが走っていて、スライド式のドアから人が身を乗り出し



写真②木陰でトランプを楽しむ子どもたち

「アクラ！アクラ！」と行き先を叫ぶ。これは乗り合いタクシーで、現地ではトロトロと呼ばれている。行き先を叫んでいる人はメイトと呼ばれ、おもに客引きや乗車料金の回収をおこなう。子どもたちの様子から、すぐに『トロトロごっこ』をしていることがわかった。子どもたちは、一日に数回ロウラの町を通過する長距離トロトロを見ているのだろう。まだ見ぬアクラに行ってみたいという願いをこめて、首都アクラを先に行き先に決めよう。私は、メイト役の子に「アクラまでお願いします」と言って葉っぱのお金を渡し、一番後ろに座った(写真③)。

その後もたびたび子どもたちの遊びを観察していたのだが、5歳以上の子たちはサッカーやカードゲームをしていることが多く、それより年下の小さな子たちは、トロトロごっこやおままごと、お店屋さんごっこ、太鼓を使った学校のマーチングごっこなどのごっこ遊びをしていることが多いことが分かった。

### みんなで日本の遊びにチャレンジ

まだダガーレの言葉が十分に話せない私は、学校で英語を教わっている子どもたちと遊ぶことが必然的に多くなってしまった。まだ英語がわからない小さな子どもたちも私と遊びたそうにしているのだが、いつも遊んでもらえず姿を消して

しまう。この様子を見て私は小さな子どもたちも一緒に遊べないかと考えるようになった。そして、せっかくだし日本の遊びをみんなでやってみようと考えた。

まず、最初にチャレンジしてみたのは『折り紙』。5歳以上の子は実際に折り紙に挑戦し、小さな子はお兄ちゃんお姉ちゃんにつくってもらった折り紙をもらう。数枚の紙から花や動物ができることに驚き、子どもたちはみんな目をキラキラさせて集まってくる。5歳以上の子は私の指示に従って折り紙を折り、小さな子は横でその完成を待つ。折り紙を折る子たちは、複雑な作業をやりこなすことに喜びを感じ、小さな子はできた作品をもらえることに目を輝かせる。男の子はやっぱり紙飛行機や車、女の子は花が好きようだ。

次は体を動かす遊びを、と思い教えたのが『だるまさんが転んだ』。ガーナの子どもたちがやっていないような遊びを選んだ結果、『だるまさんが転んだ』がいいのではないかと考えた。小さな子もいるのでルールは簡略化させた。鬼にタッチしたらすぐに走って鬼から離れ、鬼がストップと言ったら止まり、鬼が大股で3歩移動するあいだにタッチされた子が次の鬼、とした。

まずは、みんなで「だるまさんが転んだ！」を言えるように練習した。すると子どもたちはすんなり「だるまさんが転んだ」と言えるようにな



り、ルールについてもすぐに飲み込んだ。そして、とても上手に遊び始めた。小さい子たちもお兄ちゃんお姉ちゃんに教えてもらいながら一緒に遊ぶ。一度やり始めると小一時間終わらない。時には年上の子が失敗して小さな鬼にタッチされ、次の鬼をやることも。小さい子もふくめ、みんなで日本の遊びを楽しんでくれているようだった(写真④)。

今日はみんなで何して遊ぶ？

日本と違い、アフリカの農村ではボードゲームもテレビゲームもない。物がほとんどないなかで、子どもたちはいろいろな遊びを考え、新しい遊びにチャレンジしていく。空き缶の底をくり抜き、家にあった古いビニール袋を張って太鼓をつくったり、葉っぱや木の実を使っておままごとをしたり。子どもはみんな楽しむことにとて



写真③トトロゴっこを楽しむ子どもたち  
先頭に座っている子が運転手役、前から2番目の子はメイト役、一番後ろの子はお客さん役

も真剣で、何もないところから遊びを生み出してしまふ。私も幼い頃はそうやって遊んでいたはずなのだが、子どもたちが次々に遊びを見つけてくるので、いつも驚いてしまふ。

子どもたちはいつでも、新しく楽しい刺激的な遊びを探している。子どもたちは新しい遊びを期待して、私に「今日はみんなで何して遊ぶ?」と聞いてくる。その期待に応えようと、私は日本の遊びを教えたり、新しい遊びを創作

したりする。新しい遊びを提案して、子どもたちの驚いた顔や喜ぶ顔を見るのはじつに楽しい。次に村に行くときは、ケンケンでも教えてあげようかな。それとも竹トンボで驚かせちゃおうかな。子どもたちのパッと輝く笑顔を思い浮かべると、次の渡航に胸が躍る。

桐越仁美



写真④だるまさんが転んだに夢中になる子どもたち

## 徒弟アジズのお金の話

### 徒弟たちの収入

フィールドワークで通っていた仕立屋の店で、ある日偶然給料の帳簿を見た。親方が店で働く若者4人に払う、その月の給料を記したノートである。開いて記録をした後、閉じ忘れてしまったようだ。ノートは私の目の前に置かれていて特段秘密ということもなさそうだったが、私がこんなにも関心をもって中を見ているとは、親方は気が付かなかったかもしれない。できるだけさりげなく、ノートに書かれていることを凝視した。25,000CFAフラン(約5,000円)、30,000CFAフラン(約6,000円)…。この町に住んでまだ数カ月、はじめて見る誰かのお給料だった。相場はわからないものの、「この金額で食べていけるのかな」というのが、そのときに持った疑問だった。

私がフィールドワークをしているのは、ブルキナファソ第二の都市ボボジュラソである。この町では、服は注文仕立、つまり、客が仕立屋に布を持ち込んで、好きな形の服に仕立ててもらうのが一般的である。市内では、親方と徒弟数名という小さな店が数多く営業している。店で修行する徒弟は、親方の手伝いをしながら技術を

身につけ、数年の修行期間を経て独立する。私が当時通っていたのは、市内で5本の指に入るとされる有名店であった。親方のAさんは、仕立屋の店のほかに仕立技術の学校を運営し、またファッション・ショーを積極的におこなっている。洗練されたデザインと、しっかりした裁断・縫製にはファンが多い。当然仕立の料金も高く、他店の2倍、3倍は当たり前である。

店内では、親方が布を裁断し、若者たちが縫製する。4人の中では、仕立技術を一からAさんのもとで学んだ、修行4年目の徒弟アジズが最古参である。アジズ以外の3人は、既に他店で技術を習得済みで、ここでは縫った服の点数に応じた歩合給で働いている。彼らはいずれも20代前半から30代前半の若者で、高級店の品質を支える優秀な働き手である。

### 暮らしとお金

アジズたちは、朝7時半から昼休み(12時から15時)を除いて20時頃まで、店内の作業場において親方から割り振られた仕事をする。縫製が主だが、布の裁断を任されることもあるし、仕立の学校で授業を受け持つこともある。親方がファッション・ショーをするとすれば、服の制作はもちろん、ショーのリハーサルや本番も手伝う。

彼らのその月の収入は、アジズは30,000CFA

フラン(約6,000円)、歩合給で働く3人はそれぞれ25,000~35,000CFAフラン(約5,000円~7,000円)であった。全員、翌月も同じ金額を受け取っていた。あとから本人たちに聞いたところによると、徒弟のアジズは仕事量にかかわらず、毎月同額をもらっている。アジズは見習いを始めた当初は月謝を払っていたが、技術を習得するに従い、月謝を払わなくてよくなった。修行3年目に入ってから月1万CFAフラン(約2,000円)をもらうようになり、その額が増えて今に至る。ちなみに、アジズの今の仕事量を他の若者と同様に歩合で計算すると、3万CFAフランはゆうに超えるそうである。親方が仕事の量を調節し、定額を払えばいいアジズに多く仕事を振っているのだ。歩合給の3人は、ズボンに1本縫ったら1,000CFAフラン(約200円)というように縫い賃をもらうが、以上のような理由で、だいたいいつも同じ額におさえられているのだという。

彼らの収入を知って以来、私はアジズたちの暮らしに注目するようになった。もらったお金で食べていけるのか知りたかったのである。アジズを例にとると、彼は母親、姉、弟と4人で暮らしている。借家住まいで、家賃5,000CFAフラン(約1,000円)はアジズが払っている。アジズはこのほかに、家族の食費として毎日500CFAフラン(月額にして約15,000CFAフラン(約3,000

円))を母に渡しているほか、弟の学費、家の電気代を払っている。店で働く日(月~土)には、昼食代として毎日200CFA(約40円)、ひと月ではおよそ5,000CFAフラン(約1,000円)を使っている。金額がわかっている支出だけで月額約25,000CFAフラン(約5,000円)となり、収入の大部分が消えることになる。

アジズは修行中の身とはいえ、稼ぎの中から家計にお金を入れており、出費を計算すると日々食べるので精一杯ということになる。日々の娯楽や通勤のためいつか買いたいと話すバイクなど、とても手が届かないだろう。他の若者たちも、一人暮らし、あるいは家族と同居など状況は異なるが、家賃や電気・水道代、家族の食費など、やはりそれぞれ出費があるようだ。

とはいっても、アジズたちに悲愴感はなかった。また実際に、生活を楽しんでいる様子も伝わってきた。昼食以外に朝食やおやつを買って食べることもあるし、携帯電話を流行の機種に買い替えたり、DVDプレイヤーを買ったり、ある日には、自作のシャツに文字を染めつけ、踊りに行くときに着ると張り切っていたこともあった。それなりにほしいものを手に入れているようだ。

## 個人の仕事

彼らが個人でも注文を受けていると知ったの

は、それからしばらくたってからのことだった。親方からもう以外に、自分で稼ぐ収入があるのである。この個人の仕事は、仕事後や休日に独自に仕立の注文を受けるもので、作業は自宅などでおこなわれていた。親方には隠れておこなっているようだ。アジズたちは、この個人の仕事を仏語でオクラを意味する「ゴンボ」と呼んでいた。現地のスラングで「お金」という意味らしい。

ある日曜にアジズの家を訪ねると、アジズと同僚の一人が客間で服の縫製やアイロンがけに忙しそうだった(写真①)。訪ねたのは午後だったが、アジズはその日は朝5時から働いているという。客間には大きな木製のアイロン台と、炭を使うアイロン、足踏みミシン一台、そして同僚が持ち込んだ電動ミシンが一台おいてあった。さながら仕立屋の店内である。

注文してくれるのは、近所の人や、市内で知り合った人などである。日々の暮らしの中で、アジズを仕立屋と知った人の中から注文する人が現れる。アジズがつい最近スーツを納品した若い女性は、平日は銀行員、週末は近所の商店で店番をしている人だという。アジズがその商店に寄ったときに、顔見知りになっていたその女性から、「仕立屋なんでしょ？」と声をかけられた。まずは1着頼んでみると言われ、服を作ったところ気に入られて、その後彼女はさらに3着注文してくれたという。アジズは毎日自分で仕立てた服を

身に着けているが、このおかげで自分が仕立屋であることを多くの人に知ってもらえるそうだ。また、有名店で働いているということも、注文を受ける上で有利に働くという。Aさんのところで働いているなら、腕もいいだらうと思ってもらえるのである。

アジズたちの話に興味を持った私は、当時コンタクトを取っていた仕立屋協会のメンバーにも



写真①自宅での作業(縫製)中の様子

話を聞いてみることにした。ポボジュラソで働く仕立屋なら誰でも加入できる協会で、当時メンバーは60人ほどだった。このうち30人から、修行時代の話を聞くことができた。彼らは、短くて3年、長ければ10年と、人によってはかなり長期にわたって仕立の修行をした。ほとんどの人が、見習い期間中は保護者と暮らしながら、親方から昼食(代)や小遣いをもらっていたそう。小遣いは、衣服を洗うための石鹸代という名目で語られることが多かった。見習い期間中に親方から支給されるのはあくまで食事の補助、生活の支援ということのようだ。そのほかは親方の稼ぎや徒弟の店への貢献度により、稼ぎから分け前を与えられることもある。技術が上がるに従い、週末にもらっていた数百CFAフラン(数十円)が、数千CFAフラン(数百円)に上がったと話してくれた人もいた。彼らの話を考慮すると、アジズの待遇は必ずしも悪くない、むしろいい方なのかもしれない。

話を聞いたうち半数の人が、徒弟時代に個人でも仕事をし、何らかの収入を得ていたようだ。アジズたちは個人の仕事を「ゴンボ」と呼んでいたが、「ビジネス」、「ディール(英語のdeal)」などという呼び名もきいた。やはり、個人の仕事は親方には内緒だったという人が多かった。

個人の仕事をしなかった人にも話を聞くと、自分のところにきた注文も親方に取り次いだとい

う人がいた。親方のもとで技術を教わっているが、自分個人で仕事を受注するのは親方に対する裏切りだという人もいた。確かに、個人の仕事をしていた人の中には、親方の不在中に来店した客と交渉し、個人の仕事を受けたという人もおり、これでは裏切りといわれても無理はない。親方の店に夜中に忍び込み自分個人の仕事をしていた、それが親方の知るところとなってしまう、店を追い出されたという人もいた。

当時の徒弟たちが、親方に見つからないように個人の仕事をしていた話は、聞いていてスリリングであり、とても興味深かった。けれど、それ以上に印象的だったのは、個人の仕事をすることによって、徒弟たちが独立に向けて力を蓄えているということである。個人の仕事を継続することで、独立に必要な資金を貯める、あるいは自分の固定客を獲得することができるのである。ある親方は、徒弟時代を振り返り、個人で受けた注文が増え、自宅が注文の服でいっぱいになったとき、独立を決意したと語った。

アジズも、まさに自分の技を磨きながら将来の独立に備える一人である。アジズには年の離れた兄がいて、その兄に見習いを始めた当初ミシンを買ってもらった。そのミシンを使って、見習いを始めて1年たたないうちから個人の注文を受け始めた。当時は、近所の人や友人から注文を受けても、技術が伴わず、同じ人が再び注文して

くれることはなかったそうだ。その後、技術が上がるに連れ、同じ人から繰り返し注文を受けるようになった。また、彼の仕事に満足した客が他の客を紹介してくれるようになってきたという。

アジズには、修行6年目に5カ月間、個人の仕事の受注状況を記録してもらった。この期間中、アジズは月に25,000CFAフラン(約5000円)~100,000CFAフラン(約2万円)、平均して月約5万CFAフラン(約1万円)の収入があった。つまり、個人の仕事で、親方からもらう金額の1.5倍以上を稼いでいた。収入が最も少なかったのは、体調を崩し同僚に仕事を譲った月であり、最も多かったのは、クリスマスやイスラーム犠牲祭、大晦日などのために多くの人が服を仕立てた12月だった。人々が畑を耕しに農村に行ってしまう、仕立屋が暇を持て余すといわれる8月にも、約50,000CFAフラン(約1万円)の収入があった。アジズは、個人の仕事の収入で家族と自分の生活費をまかない、親方からもらうお金は貯金している。DVDプレイヤーも、その貯金で買ったものだ。

### 力を蓄え独立へ

Aさんの店では、アジズが見習い6年目に入る前に、歩合で働く3人の同僚たちが、よりよい条件を求めて店を去っていた。Aさんが固定給

のアジズに多く仕事を振り、その他の若者の仕事量を調整しているらしいことはすでに述べたが、歩合給の3人は、働きたいのに仕事をもらえないと不満を募らせていたらしい。

残されたアジズは、仲間が羽ばたく様子を見て心が動かないわけではなかったが、修行6年目になっても、月30,000CFAフランでAさんのもとにとどまっていた。6年間は親方のもとで頑張ろうと思っていたようだ。Aさんは自分の修行時代について、「3年間で技術を教えてもらい、次の3年間は親方のために働いた」、と話していた。他の3人とは異なりAさんから技術を教わったアジズは、Aさんへの義理を果たしたかったのだろう。

修行を始めて丸6年が経つ頃、アジズは保護者である兄を通じてAさんと話をし、その年の年末に店を出ることを了承してもらった。アジズに残ってほしかったAさんが、その後も様々な理由をつけてアジズを引き留めたので時間はかかったが、予定から半年経った翌年6月、アジズは店を出ることを許された。

晴れて店を出たアジズは、まず首都ワガドゥグに行き、知り合いの親方のもとでスーツの仕立技術に磨きをかけた。その後ボボジュラソに戻って自分の店のための物件を探し、店を出てから1年半後、市内の交通量の多い道路沿いに、自分の店を開いた(写真②)。

アジズは親方Aさんのもとで技術や知識を学ぶほかに、自宅で個人の仕事をし、自分の客とのやり取りの中でも仕立屋としての力をつけてきた。アジズには、既に「服はすべてアジズに頼んでいる」というお客さんがいるそうだ。アジズの店の開店当時日本にいた私は、開店やそこに至る経緯を現地で見届けることはできなかったが、アジズなら大丈夫だろうという思いで、この朗報を受け止めた。

遠藤聡子

55



写真②アジズの開いた店の外観



## 受け継がれるもの

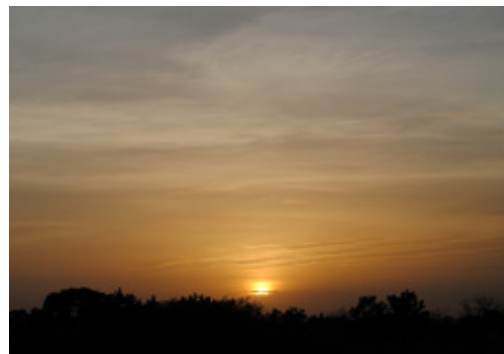
### 祭日の夕暮れ

その日は朝からお祭騒ぎだった。クリスマスは村びとが心待ちにする祭のひとつだ。教会の庭では信者のカンパで用意されたモロコシ酒が無限のように振る舞われる。その酒と、やまない楽の音に胸を躍らせて集まるのは、色とりどりに着飾った男女だ。男たちが奏でる何種類もの太鼓や木琴が生み出す音のうねりに身をまかせ、輪になった女たちが複雑なステップを繰り返しながら踊り、歌う姿は見ているだけでも楽しい。というのはまだ恥と遠慮のあった2008年の最初の調査で思ったこと。時は2013年、調査も6回目となればすこし違う。酒を交わして冗談に笑い、誘いに応えて踊りの輪に飛び込む。女たちと一緒に砂埃を巻き上げながらリズムを追いかけて、腹の底から声を出して歌っていると、日頃の悩みなんてどこかにふきとんでしまう。足を絡ませながら輪の列についていく私を振り返る女たちの顔は底抜けに明るく輝き、みんなが同じ気持ちであることを知って心はさらに高揚する。踊りは一層熱を帯び、加速される演奏と共に砂埃は一段と高く昇っていく。

そうしてひとしきり祭を堪能し、心地よい気

だるさを感じながら私は家路についた。日中、容赦なく大地を焦がしていた太陽は、空を優しい色に変えながら地平線の向こうに沈んでいく。ふと気付くと、鼓膜を揺らしていた太鼓の音は、四方八方から聞こえてくる悲痛な泣き声に変わっていた。「昨日一緒にモロコシ酒を飲んだのに！」と泣き叫ぶ声。さっきまでのにぎわいが嘘のように消え、今では村中が泣いている。なにが起きたのだらうと思っていると、ちょうど友人が通りかかった。村ではこうして人づてに、知らせは瞬時に伝わっていく。不安な面持ちで尋ねる私に、ある人が今、この世を去ったと彼はつげた。それを知った者たちが一路、感情もあらわに故人の家を目指していた。

56



写真①村の夕暮れ

## モロコシ酒

ここは西アフリカのブルキナファソ、首都から約250km北西にある農村だ。村にはブワという農耕民が住む。私はこの村での調査中、とある家族の一員として受け入れてもらい、「娘」として暮らしていた。亡くなったのは、その家のお母さんの叔母に当たる人だった。「娘」の私にとっては祖母の妹、つまり「大叔母」ということになる。

大叔母は、酒造りをなりわいとしていた。酒造りは女の仕事で、彼女たちがお金を稼ぐ手段のひとつでもある。酒とは、モロコシというイネ科の穀物と水を原料として造るモロコシ酒のことだ。2日間かまどにつききりで、煮たり、こしたりして、酵母を入れたら3日目の朝に完成する。酒は黄味がかかった橙色をしていて、すこしすっぱい。女こどもが好むのは微炭酸で甘い、朝一番のできたての酒だ。午後になると発酵が進んで甘さが消え、アルコールの強さが目立つようになる。こちらは真の酒好きが好むと言われる。ブワはモロコシ酒をこよなく愛する民族として名高い。村にたくさんある酒場をはしごして、味の違いやおしゃべりを楽しむのが村びとの娯楽だ。モロコシ酒は冠婚葬祭の時にも活躍する重要な飲み物でもある。

大叔母は、クリスマスに合わせて酒を造ってい

た。訃報を聞いて葬式に駆けつけたお母さんは、大叔母が遺した酒を売ったという。お母さんの心中を思うと胸が詰まった。そもそも大叔母はどうして亡くなったのか。—毒殺された、という噂だ。毒殺は珍しいことではない。モロコシ酒を飲む器にこっそり毒を盛るのがよくある手口だという。今回、警察の検証はなかった。真相は闇の中だ。

## 弔問

大叔母が急逝した翌朝、埋葬がいつおこなわれたのかは自宅にいてもわかった。大地が唸るような泣き声の束を、風が運んできたのだ。慌てて妹たちと庭に出て背伸びをし、土塀の遠く向こうにある声の出所を見やった。胸が痛んだ。残念ながら私は大叔母と深い交流はなかったが、近い親族だし、大叔母の息子夫婦とは親しかったので、お悔やみに行くことにした。

大叔母の家に着くと、敷地の外に男たちが座っていた。50人近い。他のアフリカの民族と同様、ブワ社会でも挨拶はとても重要である。ひとりひとりと手を握り、目を見ながら挨拶をするのは当然のことだ。大仕事に一瞬ひるんだが、覚悟を決めると順番に挨拶をしていった。やっと入った敷地の中央には、モロコシ酒造り用のかまどが備えられ、右手には大叔母の家、左手には息子

夫婦の家がある。女たちは敷地を囲む土塀に沿って置かれた椅子に、ところ狭しと座っていた。村外からも弔問客は来ているようだ。先ほどと同じように挨拶を済ませると、すこし身を硬くして近親者が集う息子夫婦の家に入った。私のお悔やみに「ありがとう」と相づちを打つ故人の義理の娘の頬は涙に濡れ、目は赤く腫れあがっていた。大切な人を失ったのだ。

挨拶が終わると、私は従兄の妻の隣に腰を降ろした。いつも棘のある冗談で私をからかう彼女の顔は暗く沈み、涙は乾いていなかった。かけることばもなかった。

敷地の入口からは、お悔やみに訪れた人たちが泣きながら入ってくる。その声の大きさに驚いてしまうのは私の性格のせい、日本育ちのせい。日本で参列した大切な人の葬儀ではできるだけ涙をこらえ、他の人もそうしていたようにみえた。ここではその逆で、感情を一切隠さず、すべてをあらわにしているかのようだ。

間もなくモロコシ酒が振る舞われ始めた。ひょうたんで作ったお椀が何個か配られ、モロコシ酒が注がれていく。飲み終わると注ぎ手にお椀を返す。注ぎ手はそれを素早くバケツの水ですすぎ、次の者に配っては酒を注いでいく。腰かけた女たちは頬を濡らし、ぼんやりとそれを見つめる。

## 想いがつなぐもの

会場には、新たに到着した弔問客の泣き声が絶え間なく響き渡る。その度に時間が巻き戻されて、悲しみが始めから再生されるかのようだ。永遠に上がることのできない悲しみの海に沈んでいる。ほとんど交流のなかった私さえこんな気持ちになるのなら、親交の深かった者たちの悲しみはどれほどだろう。みんなでモロコシ酒を飲んでいると、一緒に同じ海にいるような気がしてくる。弔問客は絶えず、泣き声はやまない。大叔母が生前いかに慕われていたのかを想像させた。

永遠と続くような暗い場所で、唯一光を射してくれたのはこどもだった。葬式にはそぐわない無邪気なおしゃべりや行動は、暗い海の底と現実とをつないでくれる細い命綱のようだ。そこにいて明く、根拠のない希望を感じさせてくれる若い命。大切な人を失う悲しみは、若い命、新しい命にすがることでしか越えていけないように思えた。先人たちも、故人への想いを託しながら命をつないできてくれたのだろうか。

2周目のモロコシ酒を飲み終えたところで、従兄の妻の手招きに導かれて隣の家へ行った。そこでは目を腫らした女たちが、汗を流して弔問客のために食事を作っていた。お母さんにねぎらいのことばをかけると、「昨日病院に行って、

1日で死んじゃった。1日で。こんなことがあっていいのか」とつぶやいた。涙と定型の挨拶ばかりの葬式で、やっと聞いた誰かの本音だった。

## 5日目の海

お母さんは連日、手伝いを兼ねて葬式に通った。3日目は、「村にはモロコシ酒がない。外の村から来た年配の女性に振る舞う分もなかった」と嘆いた。酒ができるまでには3日かかる。祭と葬式があったから、酒を造ることができた女性がほとんどいなかったのだろう。お母さんが「明日は

葬式に顔を出しなさい」と私に言ったのは、4日目の夜のことだった。末の妹によれば、「今日はハドコラ（筆者の名前）も来るかなと思って待ってたけど、来なかった」とお母さんが言っていたという。1度行ったきりになってしまっていた。翌日、調査を終えた私は重い足取りで葬式に向かった。

着いてみると数日前とは様相が違う。交わされる雑談には冗談さえ混ざり、女たちの顔は別人のように明るかった。「こないだ酔っぱらった時に夫のこと叩いちゃったわ!」なんて言いながら豪快に笑う声も聞こえてくる。公然と農作業や



写真②大叔母の家とモロコシ酒造り用のかまど。お母さん（左から2番目）と従兄の妻（右から2番目）

家事を休み、酒やおしゃべりを楽しんでいるような非日常的な空間が広がっていた。悲しみはそれぞれ心にひっそりと居場所を得たのか、みんなで沈んだ悲しみの海は、もうどこにもなかった。

とにかくモロコシ酒をたらふく飲み、たくさんおしゃべりをして大叔母の家を後にした。家に着くまでの間、お母さんは葬式で起きたもめごとに対してつばを飛ばして怒っていた。ああ、いつものお母さんだ。故人を悼み、遺された者同士と一緒に時間を過ごすうちに笑いが生まれ、関わり合って怒り、なだらかに感情を取り戻しながら日常に帰っていくのかもしれない。お母さんが葬式に出たのはこの日までだった。翌朝、彼女は暗いうちから野菜を収穫して娘を市場へと送り出すと、この数日でたまりにたまった大家族の洗濯物を1日ばかりで片づけた。

### 受け継がれるもの

最後の現地調査から帰国して3年が経った。村のお父さんからメールが入ったのは去年の末、2016年の暮れのことだ。私が村で家族と同じぐらいお世話になったイディアおばちゃんが、この世を去ったという知らせだった。実感がわかなかった。

この原稿を書きながら、不謹慎ではあるが、亡くなったときに大叔母のように多くの弔問客が

葬式に訪れる人望のある人は誰だろうと考えていたら、ふとイディアおばちゃんの顔が浮かんだ。彼女の葬式には、それはたくさんの人が集まっただろう。葬式をイメージした途端、彼女の死が私の中で形をとり、視界がぼやけていった。村の家族とうまくいかなかった時、不安な時、ふらっと訪れた私に「座れば」と声をかけ、いつも温かく迎えてくれた。彼女が無類の酒好きなこと、若い男も照れる過激な下ネタをとばすこと、金の亡者と裏口を叩かれるほど商売上手なことを知る者は、私のそばにいない。彼女を失った意味が正確にわかる人たちと一緒に、彼女の死を、寸分余すことなく分かち合いたかった。モロコシ酒を片手に沈んだあの海は、もうどこにもない。

愛しい者たちの生は、確かに私の中に息づいている。かれらの世界を彩ったすべての人を通じて、生は受け継がれていく。ひとりの人間の中には、命をつないだ先人の命、先人が出逢った者たちの命、そして自分自身が出逢った者たちの命が詰まっているのだろう。私たちはひとりで、幾千もの命を生きている。それもたくさんの想いが託された命を。私の息子はもうすぐ2歳を迎える。胸の奥深くから湧いてくる、あなたの子々孫々まで愛しているよ、という想いは、私ひとりから生まれたものではないのかもしれない。

神代ちひろ

## 嘘つきは本当に悪い人？

みなさんは、至極当然だと思っている自分の「常識」を疑った経験はあるだろうか。そして、自分の「常識」はなぜ常識たりうるのかと問うたことはあるだろうか。僕がフィールドで直面することになった二つのエピソードを紹介しようと思う。

### 除草の約束

僕はフィールドで嘘をつかれた。初めてカメルーンに長期滞在し村人と一緒に仕事をした時の話である。二週間ほど一緒に働いてくれていた村の若い男性に畑の周りの除草作業を頼んでいた。ところが、約束の翌朝、仕事をするために畑に行ってみると、おや、相変わらず雑草が繁茂しているではないか。風邪でもひいたのだろうか。昼飯時に畑から戻ると、彼は僕の家で待っていた。謝りにでも来たのか、と思った次の瞬間、彼の口から思いもよらぬ言葉が飛び出した。「除草をしたから賃金を払ってくれないか?」。僕は自分の耳を疑った、と同時に頭に血が上ってくるのを感じた。そう、彼は正々堂々と嘘をついたのである。水掛け論になってもいけないので、除草の確認をするためとして彼と

一緒に畑に行くことにした。しかし、彼は全く動揺する素振りを見せない。その自信満々さは、もしかしたら僕の記憶が間違っているのかもしれないと不安にさせるほどだった。いざ、畑に到着する。間違いなく、除草はされていない。と、彼に確認しようとする、彼は何事もなかったかのようにその場でせせと除草を始めたのである(写真①)。もうすぐ終わるから先に支払ってくれないか、とまで言い出す始末である。僕は最早、開いた口が塞がらなかった。

### 嘘をつくということ

ここまでの話を読むと、彼を悪い人だと考える人がいるに違いない。少なくとも僕はそう思った。嘘をつくのは信用ならない人だという固定観念があったし、そう信じて疑わなかった。ところが、何か妙な感じが残ったのである。そのしこりの正体を彼と別れた後につらつら考えてみる。先ず、嘘をついているというのに悪びれた様子がない。むしろ平然としている。謝ることもない。それどころか、何事もなかったかのように楽しそうに草を刈っている。大体、そんな嘘をついたところでバレてしまうのは時間の問題だろう。にもかかわらず、なぜそんな分かりきった嘘をつく必要があったのだろうか。僕は一カ月ほどしばらく考えていた。

それ以降も彼との関係が続く中、注意深く観察していると、彼はどうやら疑り深い性格らしいということが分かってきた。しかも、それは彼だけではない。他に一緒に働く村人も似たような所を持っていた。しかし、誤解はしないでほしい。彼らはみな陽気で気持ちの良い人たちだし、いつも楽しく一緒に働いている。ひねくれ者なんかではないのだ。ある日、そんなモヤモヤを現地で一緒に仕事をする信頼できる人物にぶつけてみた。すると、彼はしばらく考えた後にこう

答えた。「過去に自分があるいは家族が、外部者によって騙された経験があったとしたら、お前は外部者にどう反応するか。当初の約束と違うことをされた経験があったり聞いたりしたことがあれば、お前はどのような行動を取るだろうか。」はっとした。もし自分がそのような体験を重ねていたら、相手が本当に支払ってくれるかどうか怪しいと思っているのだとしたら、先ず相手を確認しようと思うのが自然だろう。海のものとも山のものとも分からない外部者が相手なの



写真①何もなかったかのように除草を始める村人

だ。たとえ嘘をつくという行為だとしても、それによって相手を確かめられるのであれば、身を守れるのだとしたら、村人の行動を理解はできる。質問に答えた彼がそこまで意味したかどうかは分からないが、カメルーンは他のアフリカ諸国に違わず、植民地時代という苦難に満ちた経験をしてきた。その後、勝手に引かれた国境線で区切られた「国」として、社会が成熟する時間もないままに、独立を果たした。そのような歴史の中では色々な騙しあいがあったかもしれない。家族が、あるいは知り合いが酷い目に遭ったのかもしれない。その中で自己防衛手段として、「嘘」という手段が存在するのだとしたら、単に嘘つきは悪い人、と断罪していいのであろうか。除草を頼まれた彼が一体どういうつもりだったのか、本当のところは確かめようもないし、誰にも分からない。それでも、彼らが背負っているものに寄り添って理解しようと努力することで、想像をふくらませられる。自分の価値観だけで判断しては、せっかくの素晴らしい出会いを台無しにしてしまうかもしれない。フィールドでは、相手を理解しようとする姿勢や想像力が求められる、と強く実感させてもらった体験であった。ところ変われば自分の「常識」が通用しない、という大前提が必要なのである。

いったいどこが畑なの？

続いては、「畑」に関するエピソードだ。みなさんは「畑」と聞いたらどのような風景を思い浮かべるだろうか。僕は、作物が畝に整然と列をなしている様子が目に浮かぶ。僕は畑の土壌養分に関してカメルーンまで調べに来たので、まずは村のどこに畑があるのか、車で走りながら一生懸命見まわしてみた。が、そこには藪か草っ原しか見えない。家の周りに少しトウモロコシが見えるだけで、とてもそれだけで食料を賄えているとは思えない。そこで、畑はいったいどこにあるのか村人に聞いてみた。すると、なんと僕が藪や草っ原だと認識していたところが、実は彼らの「畑」だと言うのである(写真②)。早速案内してもらおうが、山刀を片手に「畑」に入っていく。藪を切り開いて進む中、よくよく見てみると確かに色々な作物が植えてある。しかし、畝も無い平らな所にごちゃごちゃ植えてあって、とてもじゃないが管理されているようには見えない。言葉は悪いが、何となく気分で色々な種を適当に蒔いたように、当時の僕の目には映った。ラッカセイやキャッサバ、トウガラシ、バナナ、オクラ、パパイヤ、タロイモ、それに何か良く分からない樹木がたくさん。この彼らの「畑」を僕は何という言葉で表現できるだろうか。同じ「畑」という言葉で表されるにもかかわ



らず、僕と彼らで思い描く風景は全く異なっていた。

畝を作る必要はあるのか？

では、なぜ自分の知っている畑では畝を作るのだろうか。色々理由はあると思うが、湿害を防ぐための排水改善や、どこにどの作物があるか管理をしやすくする整理整頓のため、といったことを耳にしたことがある。しかし、カメルーンの

土をよくよく調べてみると、元々水はけが非常に良いことが分かってきた。日本ではほとんど見ることのない真っ赤な色をした「オキシソル」という土壌が広がっているのだが、この土は気の遠くなるような長い時間、風雨に晒されてできた土である(写真③)。元々あった栄養分はほとんど洗い流されてしまった代わりに、流れにくい鉄分が残された。鉄は空気中に長い時間置いておくと錆びてしまうが、この錆びの色が土を赤くしている。そういう土はふかふかしている



写真②これが畑？

水が浸透しやすいという性質を持つ。したがって、畝を作らないのは、彼らが怠惰なわけではなくて、元来排水のよい土である為に、必要がないのかもしれない。

整然としている必要があるのか？

管理のしやすさという面であるが、僕から見ると無秩序に植えてあるのだが、彼らはどこに何を植えているかしっかり記憶、認識しており、

いつどの辺の作物が収穫期になるかを把握しているのである。メモを取っているわけではないので、正確に記憶しておくのは到底不可能であろうと思われるのだが、確かに日々家族の食料を確保している。「畑」に行く途中には、樹や草など彼らなりの目印があるらしいのだが、熱帯で旺盛に生長する植物の姿は日々変わりゆき、僕にとっては一カ月前に通った同じ道も全く違う景色に映る。彼らとは受け取れている情報の質がまるで違うのだ。僕が同じ地点にたどり着



写真③赤土

くためには、GPSに頼らざるを得ない。このように、我々にとっては雑然としていても、彼らにとっては何の問題もない。それが、彼らの畑の在り方だったのである。ともすると、だらしのない畑、と評価されかねないのだが、畝を作る必要がないのと同じように、限られた労力を他の事に分配する彼らなりの工夫なのかもしれないのだ。

### 自分の常識を疑い、自分と向き合う

以上二つの例でみてきたように、フィールドでは僕自身の知っている常識が全く通用しなかった。嘘つきは悪い人、畑は畝を作って整然としているもの、といったような自分の世界の固定概念で彼らを判断するとどうなるのか。一歩間違えれば、不真面目でだらしのない人たちというレッテルをも貼りかねないという怖さを実感した。そこにある土壌や気候といった環境も、また、彼らの生き方や辿ってきた歴史も、どちらにも注意を払わなければ彼らのやり方を理解することはできないようだ。相手の気持ちになって考えてみましょう、なんていうのは想像以上に難しく、自分は自分が思う以上に自分の常識にとらわれていた。これはもう感覚的なものなので、自分が身をもって実感しない限りはなかなか理解できないように思う。学校で習う

知識はとても大切だが、それらをもって、フィールドで起こる自然現象や人々の暮らしについて自分自身がどう感じるのか、どう思うのか、想像力を働かせてみることで、初めて生きた知識になるような気がしている。そして、相手を知ろうとすればするほど、逆説的だが今度はそのベクトルが自分に向かってくる。異文化と触れることは自分自身と向き合うことになるのだ。それが面白い。自分が自分を知らないことに気付く。自分の常識はどうして常識たりうるのか。なぜ自分はそういう風に考えるのか。そういう自分を形作ってきたものは何なのか。違う世界に飛び込むことで初めて浮き彫りになる。フィールドに行くことで、却って勉強しなければならないことが増えるのだ。フィールドで土の研究をしようと思うと、数学や理科だけでなく、自分や相手が背負っている社会背景の知識も必要だし、それを伝えるだけの国語力と語学力も必要になる。それらを自分の頭の中でつなぎ合わせて想像力を膨らませながら相手や自分と向き合うのだ。いったん自分の知らない世界に飛び込んだ時、嘘つきが悪い人とは限らないのである。

柴田誠

## 熱帯アフリカのフィールド調査では 体調管理が大切

ガラスのない小さな明かり窓から差し込む木漏れ日と小鳥のせわしないさえずり、まったく聞き取れない言葉で話す村人達の声で目が覚めると、柔らかすぎる簡素なベッドの上で、汗だくのまましばし考えていた。なぜだろう。体調が良い。本当に予想外だ。

### 出発～アンドム（Andom）村

67

3月14日夜10時に成田空港を出発し、パリを経由してヤウンデに到着したのは翌15日夜7時過ぎだった。日本との時差は8時間なので、1日半近くかかったことになる。ホテル近くのレストランで魚のスープを頂くと、早々に部屋に戻って翌日に備えた。16日はフィールド調査の準備で、両替や薬局での抗マラリア薬の買い出し、国際熱帯農業研究所（IITA）カメルーン支所の研究者らとミーティングを行った。調査経路と幾つかの村落での活動の詳細を打ち合わせた後、皆で白身魚のソテーとフフ（後述）を堪能した（写真①）。満腹感と心地よい疲れのなか、夜半の雨音を聞きつつ眠りについた。17日、雨はすでに上がり、朝7時の時点で21℃と涼しい。す



図①調査地の位置



写真①フフと白身魚のソテー  
真ん中の白いものがフフ。白身魚は皮をパリパリにソテーしてあり、濃い目の味付けが食欲をそそる

でに人であふれている近くの屋台で、新鮮なアボカドと玉子焼き入りサンドイッチを注文した。フランス語圏だからかパン自体もうまく、しかも現地でとれたアボカドと焼きたての玉子焼きである。この屋台のサンドイッチ以上のアボカドサンドに、日本ではいまだ出会えていない。買い出しの後、午後に東へ340km離れたベルトゥアに向った。舗装道路のためランドクルーザーで時速70kmくらいは出せる。速すぎて、車窓の眺めを楽しめないなど愚痴をこぼす余裕

もあった。直径2mを超えられる木材を多量に積んだトレーラーが地響きをたてて対向車線を通り過ぎていくのが印象に残った。

ベルトゥアからの道路は舗装されていない。赤い土煙を上げながら西に車を走らせること1時間半弱。アンドム村に入った。朝から、村の女性たちがフフと油を作っていた(写真②)。この地域のフフは、キャッサバと2種類のトウモロコシを混ぜて粉にし、湯で練ったもので、現地の主食である。食感は餅やちまきに近く、味の



写真②アンドム村でフフづくり(左)と搾油(右)をする女性たち

濃い肉料理や香辛料の入ったシチューとの相性もいい。油はアブラヤシの実を白と杵でつき搾ったものだ。州都から近いこともあり、バナナやキャッサバといった主食となる作物だけでなく、カカオやコーヒーなど換金作物も多い。これらの栽培では地元の20代くらいの農家の若者達がリーダーシップをとって頑張っているようだ。この日は、35℃くらいの暑さの中、畑で土壤調査をし、午後遅くにベルトゥアに戻った。夕食は揚げたティラピアと炊いたご飯。調査後半にマラリア蚊生息域に入るため、この日から予防薬として抗マラリア薬を服用した。

#### ベルトゥア～ドンゴ村

アンドム村での4日間の調査を終え、21日朝食後にベルトゥアを出発した。この日は270km南東にあるヨカドゥーマまでの移動。途中の売店でバナナだけ買い、昼食抜きで8時間弱かかった。走り出して2時間程で道の真ん中に岩が露出しているような悪路になったためだ。Google Mapで検索してみると、ここ数年で道路環境がかなり改善しており、今では5時間弱くらいで行けるようだ。ヨカドゥーマには世界自然保護基金(WWF)のオフィスがあり、密猟対策の前線基地でもある。車窓から見える森に生える木の密度が上がってきたことから、サバン

ナ帯から南の森林地帯に入ることが実感できる。22日は朝食後、南へ220kmの国境の町モルンドゥーに向かった。到着までの5時間半、急にバンパーが外れるなど車のトラブルもあった。何とか無事に到着し、軍の施設でさらに奥地へ入る許可を得る手続きを行った。ここから、目的地であるドンゴ村へは距離にして50km弱の悪路を進む。辛うじて一台車が通れるかどうかの狭さだけではなく、所々に川があり、そのほとんどには丸太を数本乗せただけのような簡素な橋が架っている。これらの川はすべて、コンゴとの国境をなすコンゴ川に流れ込む川であるが、その中で最も大きなブンバ(Boumba)川は川幅が50m以上あり、丸太橋は架けられない。代わりに、船に車を載せ、ケーブルを手繰り寄せて対岸に移動するのである(写真③)。もちろん、流れが速いときは移動できない。村人のほとんどはモルンドゥーとの往復にバスを使っているが、本数が少ないため、あふれるほどの乗客を乗せたバスが、狭い道にひしめいていた。泥にタイヤをとられて何度も滑りながら、約5時間をかけてドンゴ村に着いた。干し魚の辛いスープとフフとビールを頂きつつ、まずは皆で10時間半を経た無事の到着を喜んだ。

## ドンゴ村

モルドゥーからドンゴ村までの約5時間、後で写真や記録を確認したのだが、実は記憶はほとんどない。おそらく、半ば気を失ったように車にただ載せられていただけだったからだろう。思い返してみると、暑さや疲労の蓄積、悪路、抗マラリア薬等、その原因はいくつかありそうだ。到着後すぐに、ここでの作業が終われば今回の調査の目的がほとんど達成される、と自分

を鼓舞しつつ、ヤケ気味にビールで疲れを胃に流し込んだからかも知れない。いずれにしろ、医療機関等もあまり期待できないだろうし、水や食事の心配もある。下痢や食欲不振もあったその時点では、南のコンゴ共和国と川ひとつで隔てただけの奥地であるこのドンゴ村での作業はかなり辛いものになるだろうとビールを飲みつつ覚悟していた。

冒頭の文章はこの翌日、23日早朝である。予想に反して、さらに悪化しているはずの体調



写真③ブンバ(Boumba)川の渡し船。ケーブルを文字通り手繰り寄せて渡る

はほぼ回復しており、土壌調査など3日間の作業もすべて予定通り終了した。このように、ドンゴ村での生活が快適だった理由としてふと思いついたのは、朝から暑く湿度の高いドンゴ村の環境は日本の夏に近く、その環境に体が順応した可能性である。朝涼しく、空調の効いたそれまでのホテルよりも、寝苦しい環境の方が体に合っていたというのは、逆説的だが腑には落ちた。

#### 調査を終えて

「日本の夏」をドンゴ村で体感したことは、言葉や食事、植生や土壌など、相違点ばかりに注目していたそれまでの調査に加え、色々な共通点にも興味が向かう契機となった。村民であるバカ・ピグミーと森との関係について、日本と民俗学的な共通点はあるのか。森から恵みを得、精霊を信じ、ケータイを使い、バイクに乗る彼らは今後、どのような社会を志向するのか、今後も注視したい点である。

一方、川に近く、熱帯林の中という生活環境において、マラリアや病原性寄生虫など感染症の深刻さを考えると、日本がいかに冬に守られているかがわかる。水がなければヒトは生きていけないが、常に高温多湿という微生物にとって好適な条件というのは、ヒトの生活を大きく

脅かす。初めての、たった2泊3日の滞在であったためほとんど体感することはなかったが、熱帯の湿潤地や森での生活の厳しさや、薬草など自然を利用する際の文化的な豊かさは表裏一体だと考える。彼らの文化を維持しつつ、生活の質を向上させるにはどうすれば良いか、日本人も含めて、知恵を出し合う必要があるのかもしれない。これから温暖化で気候が「ドンゴ村化」するはずの日本も、他人事ではないのである。

角野貴信



## 裁判から見たこと —子どもに石を投げられて—

### 村の裁判

2009年2月の昼過ぎ、私はぱっくりと裂けた額を葉草とガムテープで強引に塞がれ、怒り狂ったホストファミリーに付き添われ、目の前で進む裁判を眺めていた。炎天下のなか、気遣いで誰かが用意してくれた椅子に座らされていたが、額からの大量の出血で意識は朦朧とし、群衆の飛ばすヤジが遠くに聞こえた。私の目の前では、3人の古老たちが石の上に座って裁判を進行している。古老たちを挟んで私の反対側には、沈鬱な表情の少年たちと泣き叫ぶ彼らの母親が立っていた。さらに、その周りを好き勝手にヤジを飛ばす村人たちが取り囲んでいた。何故、このようなことになったのか…私は頭を抱えた。

### 調査地について

当時の私はエチオピアでフィールドワークを始めたばかりの学生だった。元々、雑穀栽培や在来農法に興味のあった私は、植民地化された歴史がないため、開発が緩やかで在来作物や伝統文化が多く残るエチオピアを調査地とした。そし

て、たまたま調査対象としたのが、首都のアジスアベバから約550km南西に位置する、南部諸民族州デラシェ特別自治区(Dirashe special wareda)に暮らすデラシャ(Dirasaha)の人びとだった。

デラシェ特別自治区は、面積約15km<sup>2</sup>、人口約13万人を有し、標高2561mの山頂を有するグルドゥラ山塊と、その麓に広がる標高約1100mのセゲン溪谷平野からなる。村や畑の多くは標高1800m以下の乾燥した気候の低地に位置し、生業の中心も低地に置かれている。低地には年に2回の雨期があり、2～7月に平均500mm、8～11月に平均280mmの降雨がある。しかし、降水量の年較差は大きく平均に満たないことが多々あるため、生育に一定の水分が必要な野菜類やマメ類の栽培や、毎年一定量の穀物の栽培は難しい。そこで、農業を生業とするデラシャは、昔から耐乾性・耐病性に優れたモロコシ(Sorghum bicolor)を主栽培作物とし、一定の食料を確保してきた。さらに、デラシャはモロコシをアルコール発酵させることで栄養価を高め、これを主食として日常的に大量に飲むことで、野菜類やマメ類を摂れないことによる栄養不足を解消している。人びとは朝起きてから寝るまでの活動時間のうち4～6割を飲酒に当てており、酒を飲みながら畑仕事に励んだり、綿花から糸を紡いだり、談笑したり、チェスに興じて

過ごす。人びとは山塊斜面に石造りの要塞のような村を築き、そこに木と土でコロコロベットと呼ばれる小さな家を建てて、荷運び用のロバを飼い暮らしている。

### Ga村のお金を欲しがると子どもたち

デラシェの村では、現在でも昔ながらの暮らしが続けられている。しかし、2006年から近隣都市とデラシェの行政中心地ギドレ(Gidole)をつなぐ幹線道路工事が開始したことで、他の地域から人や物、情報が入ってくるようになった。2009年に、比較調査のため2週間ほど標高約2000mに位置するGa村に住み込んでいた。Ga村は幹線道路の予定地上にあったため、2010年に取り壊されてしまった。Ga村に暮らしていた人びとは、政府から保証金を与えられ、他の村、もしくは新たな開拓地に移住した。私の印象ではあるが、滞在していた頃のGa村はデラシェ地域内の他の村と比べて治安が良くなかった。そして、他の地域からの来訪者に慣れているようであった。私が道を歩けば、子どもたちは「外人!!」や「お金ちょうだい!!」と大声で叫び、追いかけてまわってくる(写真①)。なかには石を投げってくる者もいる。これはとてつもないストレスで、いつも子どもたちが叫びながら追いかけてくるのを無視して逃げ回っていた。

### 石を投げられて額がパッキリ

Ga村に居る時は、お世話になっていたお宅の家族たちについて畑に行くのが日課だったが、その日は体調を崩していたため、一人で家の中で休んでいた。昼頃になると体調が少し回復し、朝、ホストマザーが、石鹸がなくなったと言っていたのを思い出したので、村内にある唯一の売店に出かけ、石鹸や食料などを購入した。そこまでは何の問題も無かったが、その帰り道で不幸なことに10代半ばくらいの少年たちの集団に見つかってしまった。彼らは私を見つけると、「ヘイ!!外人。お金をくれ」や「1ブル!!」と叫びながら私の方に駆け寄って来た。ちなみに、ブルとはエチオピアの通貨単位で、2009年頃の



写真①村の子どもたち

両替価格で1ブルは約12円に相当した。大した金額ではないのだが、今まで集団にお金をせびられる経験がなかった私にとっては、見知らぬ人びとがお金を求めて駆け寄ってくる様は恐ろしかった。いつもは走って逃げるのだが、本調子でないため、走る気力がなかった私はその場で、「お金なんてない!どっかに行って!」と叫び返した。私が言い返したので、彼らは一瞬ひるんだようだったが、一層語気を荒くして「マネー!マネー!」と言いながら絡んできた。そのうち、一人の少年が私の右腕をつかんできたので、咄嗟に振り払ったところ、いつものように周りの少年たちが石を投げってきた。

繰り返すが、私は体調が悪く本調子でなかった。そのため、私は石を完全によけることができず、石の一つが額に命中してしまった。頭にグワーンと衝撃を感じ、手の平で額を抑えると、血がべったりとついてた。勢いよく額から流れ出た血が左目に流れ込み、左の視界が黒っぽく濁り見難くなったので、大怪我をしたらしいということを自覚した。途端に、整った医療施設がない場所で怪我をしてしまったこと、自分が暴力を振るわれたことに対する恐怖に襲われた。自然と両目から涙があふれ、泣きじゃくってしまった。すると、騒ぎを聞きつけて近所の人たちが集まりはじめた。

額から血を流して泣きじゃくる外人を見て、

村人たちは驚いていた。私に石を投げた少年たちは、どさくさに紛れてその場から逃げてしまった。集まった人びとは、怪我の治療をするために、私を呪術師のお婆さんのお家に連れて行った。呪術師のお婆さんは他の人びとと同じく、コロコロベツトと呼ばれる伝統的な土と木、藁で作った一軒家に家族と暮らしていた。一緒についてきてくれたおばさんから渡された手持ち鏡で傷の様子を確認したところ、額はパッキリと割れ、そこから血が溢れ出ていた。私は自分の怪我を確認し、頭からスーっと血の気が引いていくのを感じた。すぐに、痩せていかめしい顔をした呪術師のお婆さんがやってきて治療してくれた。しかし、その治療法たるや、漫画に出てきそうな想定外の方法であった。まず、タライに汲んだ水で傷口をよく洗われ、アラケと呼ばれる蒸留酒を傷口にたっぷり振りかけて消毒された。ここまでは、通常の怪我の治療である。作業は荒っぽく、「痛い。痛いよ」と泣いて訴えたが、お婆さんは気にする様子もなく、傷口の周りに緑色の植物の匂いのするクリームのようなものを塗りたくった。さらに、お婆さんは、ぱっくり開いた傷口の両側の皮膚を指で思いつきつまんで、皮膚と皮膚がくっつくように固定した。この時、私は痛みのあまり、日本語で「やめてーや!」と叫んでお婆さんの手を叩いて暴れた。しかし、またしてもお婆さんは気にする

様子を見せず、平然とつまんで引っ付けた皮膚の上からガーゼのような布を押し当て、その上をガムテープで貼って固定した。これで傷の手当は、完了である。私は、朦朧とした頭で、「こんな斬新なガムテープの使い方があるとは知らなかった。ガムテープを開発した人もこんな用法があるとは思いつかなかっただろう…」と思った。衝撃的な治療であったが、額からあふれ出していた血は止まった。その後、化膿することも、傷跡が残ることもなく完全に完治したので、治療としては適切だったのだろう。

## 裁判開始

75

その後、私は呪術師の娘さんからコーヒーの葉のお茶を飲ませてもらい、木を組み合わせて作ったベッドに寝かされていた。大量出血したため、頭がふらふらしていた。数十分ほど経つと、ホストファミリーの子どもたちがやって来た。彼らは慌てた様子で私の腕をつかむと、モッラ (*mora*) と呼ばれる村内の集会所に私を連れて行った。デラシェの村には、辻々にモッラと呼ばれる石を組んで作った集会所が造られている。何か問題が起こると、デラシャはモッラに集まり、古老たちを中心とした話し合いが行われる。モッラの前には、大勢の人びとが集まっていた。

木の棒の先端にとがった鉄の突起が付いた

農具を持った男性が、人混みかをかき分けて走り寄ってくるのが見えた。怒り心頭のホストファザーだった。彼は、「何てことだ。お前にひどいことをした奴は捕まえたからな!」と叫び、一点を指さした。しかし、そこに居たのは犯人ではなかった。会ったこともない少年6人が胸の前に突き出した両手を荒縄でくくられ泣いていた。一旦は戻った血の気が、再び引いていくのを感じた。私は一生懸命、「私に石を投げたのは、あの子たちじゃないよ」とホストファザーに訴えた。しばらくすると、誤認逮捕された少年は解放され、真犯人たちが両手を縄でくくられて連れてこられた。道で見たときはふてぶてしかった彼らであるが、さすがに落ち込んだ様子であった。少年たちの側では母親たちが、「何でうちの子を捕まえるのよ!」と怒鳴り散らしていた。怒り狂うホストファザーに加え、騒ぎを聞きつけて集まった数十人の村人が好き好きにはやし立てていた。あまりにもひどい喧噪であったため、カラシニコフをもった警官たちがやって来て集まってきた野次馬を追い払うという、混沌とした状況であった。

私は、目の前で繰り広げられるおさまりのつかない様子に茫然としている間に、あれよあれよとモッラのそばに置かれた椅子に座らされて、裁判に参加することになってしまった。この裁判で私は Ga 村の置かれている複雑な状況を知る

ことができた。私は少年たちが、「お金頂戴！」と叫んで石を投げてくることをとても悲しく感じていた。アフリカやアジアの都市の治安は悪いことが多く、不良やナンパ目的の男たち、物乞いに絡まれることは頻繁にあるが、農村ではそのようなことはまずない。人びとの多くは純朴で、外からやって来た人に物乞いをしたり、攻撃的であることは減多にない。Ga村の状況は耐え難く、「何故、この村はこんなにがめつくて攻撃的なのか…」とノイローゼ気味になっていた。話を聞いていると、子どもたちがマネーと叫ぶのは援助機関の行動が深く影響していたことが分かった。Ga村はデラシェ地域の行政中心地であるギドレから徒歩でわずか30分に位置している。私がこの地域に来る前、援助団体から派遣された外国人が水道を引くためにギドレに暮らしていたようだ。彼らは山頂付近に大きなお屋敷を立てて、村びとにとっては高額な日給を支給して人を雇い、「マネー」と叫べば小額紙幣を渡していたらしい。そのため、Ga村の人びとは、外国人はお金持ちで恵まれているのだから、自分たちに職やお金、便利なシステムを与えるのは当然だと思っているようだった。また、デラシェ地域の多くの人びとが信仰するのはプロテスタントである。そして、プロテスタントの牧師が「持つ者は持たざる者へ」と説教しているのを「金持ちは蓄えがあるので、貧乏人は

金持ちからなら、お金を奪っても良い」と、誤った方向に解釈する者がいるようであった。学生である私も外国人であれば例外ではないようで、「マネー！」と叫べば、当然、お金を渡すと考えていたようだ。Ga村では、子どもだけではなく、大人からも服や食器、石鹸などを買ってくれとねだられたり、何かと小銭をねだられることが多かった。初めの頃は素直に従っていたが、お金ありきの関係を築きたくなかったので、できるだけ断るようになっていた。それをよく思わない大人たちは、子どもたちにお金を貰ってくるように指示していたようで、子どもたちは小遣い稼ぎと遊び感覚で私を追い回していたらしかった。また、石を投げてきた理由については、子どもたちの基本的な仕事は畑の鳥に石を投げて追っ払うことであるらしく、当てるつもりはなかったと話した。それを聞いて私は、「私は金づるで、畑に作物を食べにくる害鳥なのか…」と悲しい気持ちになった。結局、裁判は子どもたちと保護者達が謝罪して幕引きとなった。しかし、これは後で知ったことであるが、通常、村では怪我などを負わせると、治療費と賠償金が支払われるが、私は金持ちであるはずの外国人なため、謝罪だけで済まされたようだ。

## 一連の出来事に対する理解

のみであると考えて行動している。

砂野唯

一連の事件で、①他人によるものでも一度与えられた印象は消せないこと、②悪意と感ずることも彼らには当然の行動で悪意のもとでなされているわけではないこと、③彼らと寝食をともにしてはいても自分が内部、あるいはその社会に帰属する者ではなく、外から一時的に訪れた“別”の生き物と認識されていることを学んだ。そして、人びとの行動には外部からの働きかけがかかっていることは、確かである。お金をねだる行為は、援助団体の人に接さなければ生まれなかった行為である。また、お金を求めて石を投げる行為は、私にとっては悪意のある行為であるが、子どもにとっては遊びで、親たちからすればお金があるくせに分け与えない私が悪いということになる。そして、村の人と同じものを食べて同じ場所で眠っていても、村人は私が日本では異なった生活を送っていることを知っており、絶対に村人たちと同化はできない。フィールドで過ごすには辛い事実ではあるが、彼らを責めることはできない。彼らの認識や価値観は、悪意をもって形成されたものではないからだ。よそ者である私を泊めてくれたり、怪我を負わされると裁判を開いてくれたりと、善意も受けている。現在は、調査者である私は、彼らの価値観や倫理観を受け入れ、生活圏にお邪魔する

## 撮られるのは音楽に興じるその姿

緑の原っぱ、焚火、とまどい

はじめてミュージックビデオの撮影に参加したのは2007年、ウガンダ共和国の首都カンパラの中心部から少し離れた場所にある美しい緑の原っぱでだった。肌が白くて瞳が青い、ヨーロッパのどこかからきた白人の女性が、ウガンダ人の男性の隣で恋人役を演じてほほ笑んでいた。撮影の中心となっていた主役の小柄で痩せすぎのそのウガンダ人男性Tは、歌手であり、伝統舞踊からヒップホップダンスまでマスターする踊り手でもあり、私のよい友人だった。持参するよう頼まれたリュックサックを彼に手渡したあとの私は、普段着のままでどこもなく、周囲の人たちと言葉を交わしながらなんとなく時間をつぶした。ときどき指示に従って、現場に流れているTの歌う音楽をバックに、白人女性の友人役のひとりとしてカメラの前でつくり笑いを浮かべた。撮影は夕方暗くなるまで続いた。最後は火を焚いてまわりを囲んだ。予定が読めないのんびりとした撮影は、逆に私を落ち着かない気分にさせた。

## ビクトリア湖畔の舞

次の撮影は2010年、友人の男性Mから出演依頼を受けて行ったビクトリア湖畔。私はMの恋人役を頼まれた。出演者はその歌を歌っているMを含む2人の男性と私、そしてMと同じ職場で働いている男性、と少人数だった。ビデオカメラを手にした撮影スタッフの男性とMは相談しながら、コンクリートで固められた広場や階段、湖畔に舳ってあった小舟を使って撮影を進めていく(写真①)。延長コードを使ってぎりぎりの状態でつなげられたCDプレーヤーからはMの曲がエンドレスで流れ続ける。それに合わせてMたちは口を動かして歌っているふうを装い、私は横でなんとなくリズムをとる。すると、私た

78



写真①ビクトリア湖畔でのMの撮影の様子(2010年8月)

ちの様子を見ていた見知らぬ男性が突然割り込み、Mと一緒に踊り出し、それも撮影される。「こういうのもありなのか」とその現場を私はながめた。Mの普段の仕事は、マニキュア塗り。いつも細かく丁寧に動かしている指先は、少し野性味を感じさせるMの目の先で、ふわふわと上下していた。

#### 撮影スタッフから“実況レポーター”へ

同じ2010年、もう一件別の撮影現場に訪れた。現場の様子を手持ちのデジタルカメラで撮影してほしいと頼まれたためだ。昼間に訪れた街の中心部にあるバーの屋内は真っ暗で、しんと静まり返っていたが、電気をつけて撮影用の照明を焚いて、歌手でありビデオ撮影や映像編集も仕事にしているDに呼びかけられた若手ミュージシャンやダンサー、コメディアンの方々が入ってくると、あっという間にそこに「夜の盛り場」が出現した。ソーダに加えて、揚げた鶏肉やフライドポテトを取り寄せて、それらを飲み食いしながら撮影は進む。私はひたすらデジタルカメラを操作する。「こっち撮ってよ」パシャ。「ここもね」パシャ。「お前も入って撮るぞ」パシャ。いつの間にかビールも飲みだしている。ふとDが私に言う。「日本語で実況してみてよ。セレブのすげーパーティやってて盛り上がってる！って」

適当にその場で言ってみると、「よし、じゃあ撮影」となる。あわてて私はノートに自分の台詞を書き出す。何度かつぶやいて練習。覚悟ができてからDに声をかけると、2、3度Dの前で言われた直後、撮影。いっぱいいっぱいだった私は、思わず実際に存在するテレビ局の名前を口走ってしまう。一瞬だけ某キー局のレポーターに転身する私。そして続けてそのレポーターは、撮影カメラの前で、若手ミュージシャンと2人きりで踊らされたのだった。

#### 浴衣姿で「狂乱」

2011年、Pに浴衣を持ってこいと言われて、駆け付けた。Pは前年のDの撮影現場でソロダンスを披露していた男性。もともとダンスの才能に長けていた彼は、盛り場でダンスを披露していたが、歌手活動も開始しており、新しい曲ができたときにちょうどウガンダにいた私もそのミュージックビデオに出演しろということになったのだ。撮影現場は郊外にあるコンクリート打ちっぱなしの建物。建てている途中で資金がなくなったのか中途半端なつくりの建物と、周囲に無造作に生えている背の高い雑草には、ときが止まっているかのような静けさがただよっていた。そこにPに呼ばれたダンサーやコメディアンたちと、今回も歌手として参加すると同時



に歌の制作から撮影もこなすDに呼ばれた若手のミュージシャンたちが、2台のワゴン車で乗り入れる。一定の振付の指導がPからダンサーたちになされたあとは、流されるPとDの曲に合わせて、撮影カメラの前で何度もメンバーが入れ替わり立ち代わり踊り続ける(写真②)。浴衣に着替えてスタンバイしていた私も途中で呼び出されて踊る。私が踊っている様子に、撮影現場のみんなが笑う。みんなに盛り上がってほしくて、一緒に踊っている人にされるがまま、ウガ

ングでウケのよい卑猥な動きも取り入れる。どっと笑いが起きる。PとDも笑顔を見せた。

### 瞬時に立ち上がる歌、映像

2012年、5回目は、Dが日本に向けて曲をつくるぞと、歌制作から参加させられた。以前実況レポーターとして撮影に参加したときの曲のメインのメロディーと歌詞を使い、それを私が日本語に訳して私が歌う。数回だけスタジオで歌って



写真②カンパラ郊外でのPとDの撮影の様子(2011年6月)

録音すると、それがすんなりと採用される。曲の始まりに、「日本と言えば」と琴の音を選び出したあと、曲全体をあっという間にコンピューター上で仕上げていくD。ビデオの撮影は私の帰国前ということが条件になり、数日後に決定。なんでもいいから見栄えのする格好で来い、と言われて、ウガンダでの常識(女性は基本的にステージに立つとき足を見せる格好をする)に合わせ、少し短めのスカートを用意する。Dのスタジオ近くの駐車場兼物置きと化している敷地や道端で撮影をおこなう。私とPの友人もやってきて、コミカルな踊りを踊ってくれる。撮影の様子を遠巻きに見ていた近所の子もたちが、そのうち踊り出したので、その姿も撮影された。私が日本に帰国した1週間後にはそのビデオは完成していて、動画サイト「ユーチューブ」上で躍動していた。この映像を世界中の人たちが見るかもしれないということよりも、ウガンダの若者たちの手に握られたスマートフォン上で、もしくはDJたちによってダウンロードされて、カンパラの盛り場のスクリーンやテレビで流されることになるかもしれないと思うことのほうが、こそばゆい。動画のタイトルに添えられた「フィーチャリング ミドリ(私の名前)」という文字にも笑う。私はただ必死にその場でできることをしただけだったのだから。

## ミュージックビデオのその後

原っぱで撮影をおこなったTのビデオ、ほかの日にも撮影をしていたようで、失恋の歌にもかわらず、いや、だからなのか、出来上がりの映像には、白人女性とTとの大胆な絡み合いのシーンが満載で驚いた。私は本当に申し訳程度に映っていただけだが、テレビでも放映されていたそのビデオは、ウガンダの視聴者の興味をそそったに違いない。このビデオによってTがどこまで有名になったかどうかは定かではないが、Tは現在も歌手活動を続けて、たまにコンサートを開きつつ、ダンスグループのプロデュースもしている。彼の「フェイスブック(SNS)」上では、少しやせ型で貧相に見えなくなかった10年前の体型を保ちつつも、スマートな業界人としてスーツでパリッときめた姿が日々発信されている。

私が恋人役として出演したMとのビデオは、ほとんど日の目を見ることはなかった。Mがバーをまわって、制作したビデオを流してくれないかと頼みに行くのにも同行したが、そのビデオ放映により、彼の歌手としての人気が上がったという話は聞いていない。私がカンパラを訪れるたび、彼が変わらず女性たちの爪に丁寧な仕事を施している姿を見かけた。彼は彼の道をきちんと歩んでいるものの、恋人役としての魅力が

足りなかったか、と私は少しばかり気落ちしてしまう。

一方、私に浴衣を着せて、恋人役ではなくイロモノ扱いでビデオに出演させたPとDとのビデオは「ユーチューブ」にあげられ、100万回を超える再生回数を記録している。Pは現在も、ダンスを披露したり、ダンスを教える仕事に平行して、歌手業も精力的に続けている。音楽およびビデオの制作をD以外の人間にも依頼して、Pが繰り出し続けるミュージックビデオは、本人の服装も撮影舞台も協力者も編集技術も、どんどん手の込んだものになっているように感じる。でもきっと、現場の雰囲気はあまり変わっていないのではないかと私は推測している。ある程度の撮影内容のイメージや方向性は考えつつも、その場で軽やかに、その場の人たちを巻き込んで、アクシデントも取りこんで、段取りがあるようなないような状況で、偶然性を最大限に生かして撮影をすすめる現場。撮影したいものが最初からあるのではなく、撮影していたら出てきてしまったものを映していく現場。最初私をとまどわせた、あの緊張感のない現場だ。

基本的にミュージックビデオの撮影現場は、そのプロモーションする音楽がエンドレスで流れ続けている。その音楽に合わせて、空気は張り詰めることなく、でも身体は、心は、高鳴っていく。私には撮影後こっそり交通費程度をくれ

る人があったけれど、撮影に協力した人たちが全員報酬をもらっているわけではなかった。お金を期待した人たちの集まりというだけではとらえられない、音楽をその場で感じて一緒に盛り上がるという音楽をいとおしむ現場が、そこには出現していたように思う。そしてその現場は、きっと今日もウガンダのそこかしこで出現しているはずだ。そう考えれば、私のごちない腰の動きもまた、そういう音楽と仲間との大事な瞬間を切り取ったものなのだと思え、なんとかぎりぎり目を開けて見ることができる。そして「え、今、ウガンダにいるのか？じゃあ今すぐ撮影に来い！」その電話を少し恐れながらも、それでもどこかで楽しみにしている私がいる。

大門碧

82

[参照] (2018年2月現在)

Pati FT. Nico Rynz & Didi 【Bonfaya】

『Wili Wili Dance』<https://www.youtube.com/watch?v=nUDVggdUc3c>

Didi & Pati FT. Midoli

『Odole 【Wili Wili Dance2】』<https://www.youtube.com/watch?v=VhP8sTMUptA>

## 印度の井戸

現在、インドは急速な経済発展や人口増加により、舗装道路や電気、水などのインフラの整備が追いつかず、さらに伝統的な社会システムがこの急激な変化に対応できず、ほころびが目立つようになってきた。村落部においても様々な最新情報に容易にアクセスできる今、人々はより豊かな現代文明の恩恵、つまり最新の物質文化を得るため、現金収入を求めるようになってきている。豊かな生活をする権利は、すべての人類に共通しており、一部の発展国だけの特権ではない。しかし、様々なインフラ網や環境負荷などの知識に関する教育が行き届いていない発展途上国の場合、急速な変化は様々な破綻をもたらす。ここでは、半乾燥地に位置するインド北西部の「井戸」を題材に、伝統的な生業と化石燃料を用いた現代型生業両方の持続可能性について考えてみたい。

### 畜力揚水井戸とは

ここで話題とする地域は、インド北西部ラージャスターン州南部のウダイプル県である(写真①)。筆者が繰り返し、調査で訪れている地域の一つである。この地での調査事例を紹介したい。

インド北西部は半乾燥地で、ウダイプル県

は、年間降水量が587.1 mm (1957～2012年にかけての56年間の年降水量を平均した値：The Meteorological Centre, Jaipur, India Meteorological Dept. 2013) で、中・小規模の季節河川(雨季にしか水が流れない川)しかなく、多くの地域で恵まれた水環境下にはない。そして、アラヴァリー丘陵が南北に走り、平坦な土地もそれほど多くなく、灌漑水路網の整備も未発達である。そのため、日々必要な水の多くは井戸に頼っている。炊事や洗たく程度であれば、現在も昔も井戸に木桶や土器、バケツを投げ入れ、滑車を利用して人力で水を汲み上げている。しかし、農業用水となると人力ではとても追いつかない。そこで利用されるのが家畜の力、すなわち畜力である。この地域ではオスのコブウシを用いることが多いが、隣接するパキスタンのスインドやパンジャブ、インドのハリヤーナーでは他にもラクダやロバ、スイギュウを用いることもある。

インドの多数派宗教であるヒンドゥー教では、コブウシはシヴァ神の乗り物(乳白色のメスウシ。名前はナンディー)として神聖視されているが、畑を耕したり灌漑に用いたり最も利用されるのが、オスのコブウシである。宗教的な理由により、コブウシを食べるのは問題であるが、労働力として利用するのは問題ないのである。そして、ここで話題とするのは、コブウシの力を利用



写真①インド北西部ラージャスターン州ウダイプル県の農村部の景観

して井戸の水を汲み上げる灌漑システム、畜力揚水井戸である。

### 畜力揚水の減少

畜力揚水井戸は、北アフリカもしくは西アジアに起源をもつと考えられている、ウシやラクダなどの畜力を利用して、井戸から水を汲み上げ灌漑用水として利用するものである。南アジアでも近年、急速に普及している管井戸 (tube well：写真②) やエンジンポンプ (写真③) に追いやられ、消滅しつつあるが、インド北西部の限られた場所では、現在でも用いられている。畜力揚水井戸は2種類ある。まず1つは水車式のもので、これは井戸の一方に直交する大型の歯車 (木または金属製) を2つ造り、その回転に連動する水車に付属するひもで結わえられた複数の土器 (現在はバケツで代替が主) が水を汲み上げるものである (写真④)。もう1つは牽引式のもので、これは井戸の一方に傾斜路を造り、頸木 (くびき：ウシのくびの後ろにかける横木) をつけた2頭のコブウシがそこを前後することにより滑車を利用した皮袋 (現在はバケツで代替が主) が水を汲み上げるものである (写真⑤)。これらは、主に比較的小さな畑への灌漑用に用いられる。これらは、かつては画期的な揚水効率をもつシステムであったが、電力やディーゼルエンジン

を用いた管井戸などとは揚水効率の面で比較にならず、消滅の危機にある。調査ではそれらの分布や使用状況を調べたが、調査中にもほとんど畜力の利用をやめ、エンジンポンプに変換したり、井戸自体を廃棄し、地中から直接水を吸い出す管井戸に変えたりする事例が頻繁に見られた。2014年の段階で、畜力を継続的に利用しているのは調査した井戸の5% (1001箇所中31箇所：遠藤ほか 2015) とすでに消滅の危機にある状態であった。

### 持続可能性

なぜ、畜力揚水井戸は急速に消滅しつつあるのだろうか。その原因はいくつか考えられるが、次の2点が大きなものと考えられる。まず、揚水効率がディーゼルエンジンや電力を用いるのに比べ、著しく劣ることが挙げられる。次に、動力源であるオスのコブウシの減少が挙げられる。

これらの2点について状況を説明する。まず、揚水効率が劣るという点であるが、これは、畜力と化石燃料・電力とでは馬力や持久力が大きく異なり、同じ時間揚水した場合、水を供給できる畑の面積が畜力のほうが圧倒的に劣り、解決策はない。また、畜力揚水井戸の場合は常に人がウシの側において、コントロールしなければいけないが、化石燃料・電力を用いる場合は、基本的



写真②インド北西部の管井戸



写真③インド北西部の井戸に設置されたエンジンポンプ



写真④インド北西部の水車式の畜力揚水井戸





写真⑤インド北西部の牽引式の畜力揚水井戸

にはいったんスイッチを入れれば、放置し、違う作業ができるため、人の作業効率も異なってくる。ただし、畜力と比べてエンジンポンプや管井戸の導入、維持には大きな金銭的な負担がかかる。そして、その資金を得るために日雇い労働に出かけることとなる。農村の労働人口の都市部への流出は、無視できないものであるが、インドではそれはまだ深刻な問題となっていない。それは現在進行形で人口が増加し続け、また都市部や国外で得た資金が農村に還元されているからである。この地域では家族や親族を支援する慣習は根強く残っており、出稼ぎや日雇いでかけた者は、自分の出身村に残る家族や親族にエンジンポンプや管井戸の導入資金を提供する。しかし、このような慣習、資金のサイクルが今後も続く保証はなく、今後農村の労働人口の減少が大きな社会問題となる可能性はある。

次にオスのコブウシの減少であるが、実は家畜頭数自体は増加している（Government of India 2014）。これはインドにおいて1970年代後半から展開した「白い革命」以降、ミルクの増産のために乳牛であるメスのウシを増やすことが推奨され、各世帯でも現金収入に直結するメスのみを飼育する傾向が多くなった。一方のオスウシは、畜力以外の利用価値が低く、コブウシを神聖視しないイスラム教徒などに肉牛として売却され、その数を減らしていった。インドではメス

ウシを動力源に利用することは基本的にないため、動力源としての畜力は減少の一途をたどっている。特に灌漑に用いるウシは必ず2頭立てであり、最低2頭のオスウシが必要となる。現在ではオスウシを2頭以上所有している世帯は限られており、世帯間でオスウシを融通しあわなければ畜力を利用できない状況になっている。ただし、2014年以降インドの政権与党となったBJP（インド人民党）の影響（この政党はヒンドゥー至上主義を掲げており、ヒンドゥー教に基づく政治思想により、コブウシの神聖視を厳守する傾向にある）により、公的にコブウシの肉牛への利用が制限される州が増えてきたため、今後オスウシ数は徐々に増えていく可能性はある。

以上のような理由により、畜力揚水井戸は消滅の危機に瀕している。その一方で、インドは急速な経済発展と、過密人口のため、現在、様々な問題に直面している。その1つがエネルギー問題や環境汚染である。生業の機械化は、効率は良いがこれらの問題を悪化させる効果ももつ。わずかしか化石燃料を産出しないインドでは、エネルギー不足は深刻で、物価が日本の数分の1にもかかわらず、ガソリンの販売価格は日本より高い（2016年3月現在）。エンジンポンプなどを用いて、井戸から揚水するための燃料を買うために日雇い労働に出かけざるをえないという状況での急速な機械化は、社会システムの崩壊をも招きか

ねない。現金収入の少ない世帯は、エンジンポンプの購入や、購入しても稼動するのが困難となる。また、エンジンポンプにより、畜力より過剰に揚水され、井戸の水位が下がり、畜力にたよる世帯はその利用を断念せざるをえない状況にもなっている。その他にも、日雇い労働のために村を不在にする者が増えると、村落内で常時、夜警やインフラの維持管理などを役割分担することで成り立っていた相互補助のシステムが立ち行かなくなり、より個人主義的な傾向が強くなる。そして、成功した者と、上手くいかなかった者の経済格差はより明瞭となり、土地を手放す者もでてきている。

家畜は畜力を提供するだけでなく、乳や毛、肉、皮をも資源として提供し、繁殖によって再生産可能で、機械よりもはるかに環境融和性の高い貴重な存在である。この利用方法の伝統知の消失は、社会的な損失であると考えられる。また、エンジンポンプや管井戸による揚水は時に過剰になり、地下水位の低下をも招いている。機械化が進行した村では、井戸の水位が低下し、畜力では物理的に揚水困難になり、畜力用水を継続していた井戸もその継続を断念したという事例も複数見た。技術進化や経済発展を否定するつもりはもちろんだが、今一度現在の経済効率だけではなく、次世代以降も利用可能な水資源の利用を考える時が来ている。

遠藤仁

## [引用文献]

Government of India, Ministry of Agriculture  
Department of Animal Husbandary &  
Dairying 2014 19 th Indian Livestock  
Census, All India Summary Report.

The Meteorological Centre, Jaipur, India  
Meteorological Dept. 2013 District-  
wise monthly rainfall data, list of  
raingauge stations, India Meteorological  
Department (IMD).

遠藤仁・宮寄英寿・K.P. Singh・田中樹 2015  
「インド北西部における畜力揚水灌漑システムの利用とその変容」『日本沙漠学会 第26回  
学術大会 発表要旨』

## 極小書店の心意気 — 沖縄とインド —

世の中はどんどんと大規模化するばかりだ。小売店が町から姿を消し、大規模なスーパーマーケットが席卷する。かと思えば、そのスーパーマーケットも、グローバルに展開するネット通販にバタバタとなぎ倒されてゆく。“寄らば大樹の影”、“長いものには巻かれろ”でもあり、スケールメリットに意味があり、それはそれでよい側面があることも確かだが、一方で、それがもたらす弊害も大きい。

91

第一、大規模なことは、それが平板で平準化されたものでもあることである。それは、規格化されているということでもあり、円滑な社会活動に必要でもあるが、一方で、面白みに欠ける。社会が平板になり平準化が進むと、逆に多様性や個性が欲しくなってくるともいえる。

それは、本の世界も同じである。

大規模書店やネット書店だけになってしまったらこの世はずいぶん面白くなるだろう。

人のあるところに本屋あり。人は耕したり、獲ったり、漁したり、つくったり、しゃべったり、食べたりする生き物であるが、読む生き物でもあるので、人が住むところには本屋がある。

とりわけ、こんなところに、というところに

本屋があるときや、こんな風に、と思っても見ない方法で本が売られている時はうれしくなるし、それは文化にとって必要なものだと思う。

### 沖縄市場の極小古書店

沖縄の那覇の国際市場でそんな出会いがあった。

国際通り市場というと、那覇の胃袋を支える市場であり、近年では、日本国内のみならず、中国や台湾、韓国からの観光客も引き付ける観光スポットとなっている。観光スポットであるから、お土産物屋も多い。だが、伝統ある庶民の市場でもあるので、人々の暮らしに密着したものを売る店も根強く残っている。そんな中に、一軒の古本屋があるのだ。

市場に古本屋があることはそれほど珍しいことではないが、その面白さは、それが、わずか約3メートル四方ほどの空間であること。間口が3メートルほどで奥行きも3メートルほどの小さな店が、その古本屋「ウララ書店」の店舗だ。右となりは、たしか傘屋で、左隣はお土産物屋、向いは鯉節屋だったと思う。まさに市場の真ん中にある店。店主はまだ若い女性で、もともとはジュンク堂で働いていたそうだが、ジュンク堂の沖縄店の開店の手伝いに来て、そのまま沖縄に居つき、この店を先代から居抜きで譲り受けたとか。『那覇の市場で古本屋』（宇田智子著、ボーダーイ

ング刊)という本に彼女が書いている。

店は小さいが、その小さい中に、本棚が10本以上あり、ぎっしりと本が詰まっている。小さいけれどなかなかの品ぞろえで、沖縄関係の本はもとより、思想や文学関係も充実している。稀覯本の『沖縄古語辞典』の隣に、山之口猷の詩集があり、その隣には藤井貞和の南島文学論がある。ブログでの発信を通じて、韓国や台湾のインディペンデントな書店とのネットワークも持っている。小さいけれども、あるいは小さいからこそ、しっかりとした存在感がある。

#### インド・ベンガルの移動式自転車書店

そんな小さな本屋には、インドでも出遭った。ベンガルにあるタゴール国際大学(ベンガル語でヴィッショ・パロティ大学と呼ばれることもある)に行ったとき、そのキャンパスで販売していたのが、「移動式自転車書店」。

タゴール国際大学は、ノーベル文学賞も受賞した詩人のタゴールが1921年に設立した大学で、全人格の陶冶を目指し、授業は樹下で行われるなど、自然と一体化した理想主義的な教育で知られる。樹下で授業が行われるくらいだから、キャンパスは、大きな木がたちならび、ちょっとした森のようにになっている。大学ができる前は、この地は、荒地地だったが、森は、タゴールたち

が植林したことによりできたものだそうだ。

その移動式自転車書店は、キャンパスの一角のインドボダイジュの日陰にあらわれる。自転車は、後ろに屋台状のトロリーが取り付けられていて、その屋台のふたを開ければ、その蓋が陳列台になり、その屋台自体は平台になる(写真①)。ふたにブルーシートをかけ、それを菩提樹の枝に結び付ければ、即席の日覆いができる。手前には簡易の小さな台を広げてそこにも本を並べ、傍らにはベンチも用意する。ちょっとした読書空間の出来上がりである。

売られているのは、新聞や雑誌といった日常的な物から小説や学術書まで幅広い。タゴール国際大学は、独自の教育によって有名で外国からのゲストも多いので、その外国のゲストを当て込んだ英語版のタゴールの詩集や写真集も用意されている。

場所がキャンパスを貫く幹線道路のちょうど交差点なので、ひっきりなしに客が来る。ちょっと立ち寄って新聞を買うといった人が多いが、中にはじっくりと品定めをしていく人もいる。店をやっているのはまだ若い彼。きっと彼は、ならんでいるそれらの本を自分で仕入れて、そうやって売るのだろう。品ぞろえといい、並べ方といい、客あしらいといい、なかなかのものだ。いい面構えをしている。この分だと、彼は、もしかしたら、数年後には、大きな本屋を持っている

かもしれない。だが、案外、彼は、自分の城のようなこの小さな動く本屋を気に入っているのかもしれないとも思う。

#### インド・ニュー・デリーのカプセル式書店

インドでは、ほかにも、そんな小さな本屋をいくつか見た。写真は、ニュー・デリーの街角にあったもの(写真②)。直径3メートルほどの円筒形のガラス張りの建物の中には、ぎっしりと本

が詰まっいて、外に向かって背表紙が見えている。円筒なので厳密にはカプセルとは言えないのだが、とりあえず、カプセル式書店とでも言いたくなる。

この円筒形の中には客は入れないのだが、窓口から、ほしい本のタイトルを言うと、店員がそれを取って、窓口から渡してくれるという仕組みだ。

それにしても見事なディスプレイだ。窓に合わせて芸術的に本が積み上げられ、内部にもこま



写真①移動式自転車書店(インド、シャンティニケタン)

かな仕切りがあり、そこにも本が積み上げられている。

どんな本があるのかと近寄って見たらほとんどが英語の本で、しばらく眺めていると、店の親父が近づいてきて、「ラシュディ（インド系作家のサルマン・ラシュディ Salman Rushdie）の本ならほとんどあるぜ」と胸を張った。ここにもミニ書店の誇りがあるようだ。

文化の豊かさは多様性が育む。これらの本屋の営為はたしかに小さい。しかし、その小さな

営為が多様性を支えている。そして、営為の後ろには、その人たちの誇りと創意工夫がしっかりと詰まっていることもこれらの本屋の個性的な在り方は教えてくれる。

寺田匡宏



写真②カプセル式書店（インド、ニューデリー）

## 編者と執筆者の紹介

### 田中樹 (たなか うえる)

総合地球環境学研究所・客員教授、ベトナム・フエ大学名誉教授。専門は、環境農学、土壌学、地域開発論。アフリカやアジアの在来知に学び、人びとの暮らしと資源・生態環境の保全が両立するような技術や生業を創り出す研究に取り組んでいます。

### 石本雄大 (いしもと ゆうだい)

青森公立大学・地域研究センター・研究員。専門は、生態人類学、アフリカ地域研究。アフリカ半乾燥地や日本の過疎地域において生業(なりわい)と食の研究に取り組んでいます。

### 渡邊芳倫 (わたなべ よしのり)

近畿大学農学部・研究員。専門は、土壌学、環境保全型農業。山から水田までの農地環境から効率的で持続的に利益を得るにはどうしたらよいか?をテーマに、森林や田畑の環境とその管理方法を研究しています。

記事への謝辞：この記事のもととなった調査の際には、ナイジェリアの研究所、政府機関および住民の皆様大変お世話になりました。

95

### 清水貴夫 (しみず たかお)

広島大学教育開発国際協力研究センター・研究員。専門は文化人類学、アフリカ地域研究。アフリカの子ども、特にストリートで生活する子どもやクルアーン学校に通う子どもたちに着目し、西アフリカ社会の諸相を明らかにすることに関心を持っています。

記事への謝辞：この記事は、総合地球環境学研究所「砂漠化をめぐる風と土と人」プロジェクト、および科研費(25770312)の成果の一部です。

### 荒木良一 (あらかき りょういち)

和歌山大学・教育学部・准教授。専門は、植物育種学、植物栄養学。肥料成分の輸送メカニズムや植物の有用成分に焦点を当てた研究に取り組んでいます。

記事への謝辞：この記事は、科研費(26300015)の成果の一部です。フィールド調査で出会ったタミルナードゥ州(インド)の人々に感謝します。

### 石山俊 (いしやま しゅん)

国立民族学博物館・プロジェクト研究員。専門は、文化人類学。アフリカ、サハラおよびその南縁における地域構造の研究、アフリカ・アジア乾燥地域を中心とした生業に関する研究、地域社会における「篤農家」の役割に関する研究をしています。



### 宮崎英寿 (みやざき ひでとし)

総合地球環境学研究所・外来研究員。専門は、境界農学、環境土壌学。アジアやアフリカにおいて家畜糞尿を介した牧農共存のあり方に関する研究、国内外において雑穀研究、日本の農家レストランに着目した研究活動に取り組んでいます。

記事への謝辞：この記事は、総合地球環境学研究所「砂漠化をめぐる風と土と人」プロジェクト、および科研費(24251005)の成果の一部です。

### 桐越仁美 (きりこし ひとみ)

東京外国語大学・現代アフリカ地域研究センター・特任研究員。専門は、アフリカ地域研究、地理学、生態人類学。西アフリカの人びとの自然資源利用における協力関係や商業上の信用形成に関する研究に取り組んでいます。

記事への謝辞：フィールド調査では、Dandagoum 村と Kuoli 村のみなさんにお世話になりました。この記事は、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土」、国土地理協会第12回学術研究助成「西アフリカ・サヘル帯における砂漠化問題と在来知識にもとづいた新しい砂漠化防止対策の検討」および科研費(13J02096)の成果の一部です。

### 遠藤聡子 (えんどう さとこ)

内閣府大臣官房企画調整課野口英世アフリカ賞担当室・主査。専門はアフリカ地域研究。アフリカのプリント更紗「パーニュ」を用いた衣服とそれを作る仕立屋のように、アフリカの文化と、それを支える人の仕事に関心があります。

記事への謝辞：本稿の主人公アジズ・ジゲムデさんをはじめ、ボボジュラソの仕立屋さんたちにお世話になりました。記して謝意を表します。

96

### 神代ちひろ (くましろ ちひろ)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程。専門は、アフリカ地域研究、文化人類学。ブルキナファソの農村において、開発プロジェクトやマイクロファイナンスの利用、自ら金融活動や菜園の経営をおこなう女性グループが、個人個人の生活の中でどのような役割を果たしているのかを明らかにする研究に取り組んでいます。

### 柴田誠 (しばたまこと)

京都大学大学院地球環境学堂研究員(2018年3月まで)、新潟食料農業大学助教(2018年4月から)。専門は、土壌学、環境農学、生態系生態学。アフリカ・アジアの熱帯林やそで行われる農耕活動について農学・生態学的手法を用いて調べています。

記事への謝辞：フィールド調査の際には、Dieudonne さんや Germain さんをはじめ、Andom 村の方々にお世話になりました。この記事は、科研費(13J06387、24228007)および SATREPS 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」の成果の一部です。

### 角野貴信 (かどの あつのぶ)

公立鳥取環境大学・環境学部・准教授。専門は、土壌学、生物地球化学。炭素循環過程の解明と、持続可能な土壌資源管理の研究に取り組んでいます。

記事への謝辞：この記事は、科研費(21405039、21255011)の成果の一部です。

### 砂野唯 (すなの ゆい)

名古屋大学大学院生命農学研究科リーディング大学院ウェルビーイング in アジア実現のための女性リーダー育成プログラム・特任助教。専門は、地域研究、環境学、食文化、醸造学で、アフリカやアジアにおける環境と歴史、食文化のつながりについて研究しています。

記事への謝辞：フィールド調査では、村の皆様にご多大お世話になりました。この記事は、財団法人日本科学協会笹川科学研究助成(2009年度)および科研費(15K16188)の助成を受けて実施された調査の一部です。

### 大門碧 (だいもん みどり)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・特任研究員、北海道大学国際部・特定専門職員。専門は、地域研究、都市人類学。アフリカ都市の暮らしに、エンターテイメントをつくりだす様子からアプローチしてきました。調査地であるウガンダの首都カンパラの人びと、私の家族でもあるウガンダの人びと、そして現在の生活場所であるザンビアの首都ルサカの人びと、みなにいつも私は生かされています。

97

### 遠藤仁 (えんどう ひとし)

人間文化研究機構 総合人間文化研究推進センター研究員、秋田大学国際資源学研究科(現代中東地域研究拠点)客員研究員。専門は民族考古学、物質文化研究。南アジアや中東の伝統的な生業技術や物質文化を記録し、どのように後世に残せるかという研究に取り組んでいます。

記事への謝辞：この記事は、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土」および科研費(26760014)の成果の一部です。

### 寺田匡宏 (てらだまさひろ)

総合地球環境学研究所・客員准教授。専門は、歴史学、メタヒストリー。歴史や記憶の立場から環境をどう語る(叙述する)かに関心を持っています。

### フィールドで出会う風と人と土 3

---

編 者 田中樹 宮寄英寿 石本雄大  
デザイン 鈴木あき(すずきち)  
発 行 総合地球環境学研究所  
京都市北区上賀茂本山 457 番地 4  
発 行 日 2018 年 3 月 22 日

©2018 田中樹、宮寄英寿、石本雄大  
ISBN978-4-906888-50-4

